

《前編》

《前編》には、第一次投稿締切り日とした
平成十八年十月十日頃までにお送り頂いた
方々のご文章を収録させていただきました。

1 鮮やかに蘇る 榎本恵吾先生の思い出

大阪市城東区 村上 拓夫

(一)

誰も手を挙げない。初めての座談会でのこと。僕は質問した。

「なぜ、あんな強欲な人に出会ってしまったのですか？ 悪い業があるのでしょうか？」と。

今考えてみれば、あるから出会うのであって、なんと馬鹿な質問であろう。榎本先生は「君は善業の方を考えなさい。善い業がなければ、宇治へは来れないんだから」とお答えになった。

先生には、苦悩を乗り越えた人特有の静けさがあつた。深い苦しみ、大きな喜び、両方を知っておられる方だと直観した。

僕は榎本先生の座談会に毎日通い詰めた。朝飛び起きると京阪に乗り、宇治に着くと、受付で千五百円払ってから、先生の班にもぐりこんだ。また、先生の講話の日時だけを問い合わせておいて、それだけ出席した。実は、先生のお話は、当時の自分の悩みに直接関係あるわけではなかった。しかし、引きつけられて仕方がなかったのである。

そんな座談会でのこと、「質問はありませんか？」と先生が何度おっしゃっても、一座の人々はシーン

としたままであった。僕は思い切つて手を挙げた。「神想観中は靈的悦びを感じるが、日常生活では良心の呵責に苛まれるのですが……。」

先生は、本当に丁寧に回答してくださった。

「ないほうがいいという『不完全』は無いのだ。どの不完全が、ではない。不完全なるもの、そのものがないのだ。人間は、罪を犯せてないのだ。『神である自由』しかないのだ。」

そういう意味の話を、諄々としてくださった。胸に沁み込むような感動を覚えた。

ところが、話がなかなか終わらない。回答し始めてからほぼ一時間が経つても、話はまた終わらなかった。僕はハラハラしだした。他の人に悪いと思つた。僕への回答はそのぐらいでいいから、「次の人に、質問がないかきいて下さい」とも言い出せず、ようやく話が終わったときに、修験者風の男が怒り出した。先生に対しては怒れないから、僕に対して怒つたのである。飛び入りで来ておいて質問するとは何事だ、というわけである。

先生と僕とでなんとかその場を丸く収めた後に、老夫婦が質問したのだが、これがいけなかった。質問の仕方が悪かつたのだろう。今度は、榎本先生が烈火の如く怒りだした。後にも先にも先生がお怒りになつたのを見たのは、この一度切りであった。相当スツタモンダしたのであるが、先生ご自身が何とかその場を収められ、座談会はやつと終わった。

さんざんなことになってしまったと、悄然として廊下を歩いていると、榎本先生が追っかけてこられた。予想外に明るい声であった。

「君の質問はいいネー。話が引き出される。いつでも幽齋殿に来てください」

話が引き出され過ぎてトラブルになつたのであるが、先生、全く無頓着。カラリとしたものであった。

あるとき、幽齋殿のソファのところで、旅先で買った酒をお土産として先生に手渡すと、僕の目の前でグビグビと全部ラッパ飲みしてしまい、空瓶をガチャンとごみ箱に入れてしまった。

「あーっ！」と僕は思った。これで先生は帰りに運転できなくなったのである。自動的に僕が運転してお送りすることになった。僕は身を固くした。事故でも起こしたらエライことである。慎重にやるのだ。

車内で先生が「白山神社へいこう！」とおっしゃる。僕は黙々と運転した。

だが、一本筋の違う、変な林道へ迷い込んでしまったのである。狭い道で、Uターンもできない。農家の軽トラックが、対向車として来るかもしれない。これはしまったと思ひ、戦々恐々として運転していたのだが、先生は隣の席で「ほー、きれいだなあー」と木々の緑を楽しんでおられた。道に迷っていることなど、どうでもよいようであった。今思い返すと、同じ車内で冷や汗をかいている僕と、悠々と景色を楽しんでいる先生とのコントラストが、なんとも滑稽でもあった。

それでもなんとか白山神社に着くと、先生は、農家の人が焚き火の跡に積んだ木の枝の束の中から、適当なやつを一本引き抜き、ステッキ代わりにして地面をコツコツ叩きながら歩かれた。気に入った樹木の前に来られると、しみじみと見上げて感嘆された。先生は感性のとても美しい方である。

参道の石段を登らず、横にまわりこみ、川のせせらぎを眺めていたときのこと。

「ここから登ろうー！」

と先生がおっしゃった。そこは木の生えている土肌の急な斜面であった。先生といっしょに木につかまり、足元の落ち葉にズルズル滑りながら、汗だくになって上まで登っていった。なぜ、あんな危いことをしたのだろう。そのとき僕はなんと、サンダル履きだったのである。

でも、僕は、「榎本先生」というと、あのときの木の枝の手応えや、落ち葉の感触が、今も鮮やかに蘇

るのである。

(11)

十年ほど前のことである。仕事上の悩みで苦しんでいたとき、毎週のように伊勢神宮の荒祭宮で午前中一杯祈っていた時期があった。帰途、草餅を食べさせる茶店においてあった神誌を見て、宇治に向かったのである。

榎本先生は、ある座談会のあと「いつでも来なさい。」とおっしゃって下さったので、当時働いていた大阪南港の職場から、

「明日、何時頃に幽齋殿にいきます」と先生に電話したのだった。

ところが、宇治に着いて末一稲荷神社に参拝していると、背後の参道を走る車の音がする。振り返ると、ブロロ・・・と無情にも榎本先生の車が参道を下っていくではないか。完全に忘れられているのであった。日頃の行いが悪いと神の心になわずこうなってしまうのである。その日はしょんぼりして帰途についた。それ以来、先生に会いたいと思ったら即電車で飛び乗ることにした。幽齋殿の一時の神想観に間に合えばいいのである。三十分間の神想観後、先生と一階に降りると「ちよつとそこで待っていてください」とソファを指さされ、しばらくすると祈願用紙の束を部屋に置いて戻ってこられる。そこでテーブルの花瓶をはさんでしばしお話をしてくださった。もともと、ソファで僕を待たせていることを忘れ、そのままご自宅に帰ってしまわれたこともあったが、今では懐かしい思い出である。

「無い、無い、無い。無い」と言えるすべては無い。無い、無い、無い」という連続も無い。その

“無い”ということも無い。」

とまことに澄んだ雰囲気の中で話された。取り巻く空気が軽く涼しいのである。その生命的な感じは完全に言葉で言い表すことが難しい。

先生のところへ三、四カ月に一度ぐらいのペースで通っているうちに、ソファでの歓談後、ご自宅にまで連れていってくださるようになった。平等院の近くであった。

ご自宅に着くと、先生はお酒かビールを必ずお召し上がりになり、僕はコーヒーかお茶でお相手をした。僕は酒が飲めないのである。先生はスルメや柿の種やピーナツを出して下さったものである。それらをポリポリと食べながら、実に様々な話をした。そのうちに先生がねむそうにされる。その頃を見計らってお暇するのが常であった。

先生がねむそうにされない日は、そのまま宇治橋のたもとにある「サイゼリヤ」に行くことが多かった。先生は必ず入口に背を向けて座られ、たいていはステーキとワインを注文された。僕は赤いスパゲティを注文し、絵の具でも溶かしたような緑色のソーダ水を飲んだものである。

先生の不思議なところは、僕に神想観をしないとか、聖經をよみなさいとか一度も言わなかったことである。十年近くお付き合いさせて頂いたのだが、一言もない。そういうえば感謝しなさいとか、拝みなさいと言われたこともなかった。先生は徹底的に恬淡であった。ただ、

『生命の真相』は原典を読みなさい。編集してまとめたものは雰囲気が違う。」とかなり厳しい表情でおっしゃった。

「もとの清らかなおさまりから切り取ってくるのは違う。」

「引用された文章は、元に帰りたいといっているよ。」とも。

谷口雅春先生の御文章に対する榎本先生の厳肅な崇敬の念を感じないではいられなかった。

先生との対話の内容は年々変化していった。最初のうちは、僕が日頃の悩みを打ち明け、それに対して先生が真理の話で答えてくださるという形だったのだが、先生と何度もお話するうちに、先生も全く悩みから解放されて生きておられるのではないことが感じられてきた。先生はいつもにこやかで淡々と話していたのであるが、ジッと対座していると、先生の言葉の端々や表情から、胸の内にある様々な想いが伝わってくるのであった。

僕は、先生と会っているときは自分の悩みの暗い話はやめようと思うようになった。

後年は、古本屋の話、うどん屋の話、コーヒー屋の話、旅先の話をし、先生はおもに聞き役になってくださった。この頃になると、信仰の話もほとんどしなくなり、お会いしてもあつさり世間話をし、近況を話し合っただけで散歩して駅でお別れするという風であった。宇治本山の裏の白山神社に参拝しはじめたのもこの頃である。先生はしきりに樹木の前に立ち止まって枝々の連なりを眺め、幹に手を当てておられた。木々の生命と語りあっておられたのかもしれない。

先生の中には年齢を超越した何かがあった。お会いしているうちに、先生が自分の父ほどの年齢の方であることを忘れさせられた。

先生は宗教家として偉大な業績を残されたが、そうしたことを抜きにしても、人間性の素地そのものが美しかった。

大阪の北浜でコーヒーを飲んでいたとき、携帯が懐で鳴った。訃報であった。

四女の妙子さんが連絡してくださったのである。僕は呆然とした。次の瞬間、もつと先生孝行しておけば良かったという想いが痛切に湧いてきた。喫茶店を出て京阪の地下通路を歩いていると、フツと先生の気配を感じたのである。

しばらくそこに立ち尽くしてしまった。

僕もいつかは地上を去る日が来る。

あの世に帰ったら、今度は僕が先生にご馳走して差し上げたい。地上ではさんざん奢っていたのだから。

僕は幸運であった。仕事が学習塾であったから、夕方に帰ればよかった。平日の真昼間であっても、宇治に行けた。先生と生活時間帯が完全にズレていたのが幸いしたのである。僕は先生が起床される頃に就寝する生活であった。

榎本先生のことを想うと、もっとこうして差し上げればよかった。ああ、いらぬことを言ってしまったと後悔だらけである。これも、来世以降の宿題であろう。

(三)

「現象は良くするのではなくて、ナイということをはッキリさせないといけないよ。」

宇治本山の地下食堂で、先生は静かにそうおっしゃった。そのときは練成中で、神奈川から来た失業中だという男性と同席していた。緑色の湯呑みを手握りながら、奥のテーブルに二人で並んで先生のお話に耳を傾けていた。たしか、夕食後のひとときであったと思う。

僕は口を開いた。

「一切ごまかしのない、良心の苦しみのない生き方は……」

とそこまで言ったとき、先生が遮られた。

「それはできないだろうね。」

と穏やかに頬笑まれた。

「それができたら神ということだからね。」

何か温かいものが胸にひろがる。大丈夫だ、できなくても生かされているよという響きがその余韻にあつたからである。

榎本先生の講話に、なぜあんなに新鮮さを感じたのだろう。それは、今までに聴いた宗教家や教師の話と根本的に方向性が違うからなのである。それらの先生方は、幸福になるための条件を説き、その条件を整えるための努力を奨めるのであつた。

榎本先生は、「はじめから生かされている」と説かれた。無条件なるものを味わうように導かれる。實相をよろこびなさいと。よろこんでいいのだ。よかつたのだと。大いなるゆるしの雰囲気であつた。何か、解放というものを感じるのである。演壇に立たれている先生は光顔巍巍こうげんゑいゑいたる姿であつた。

先生の御姿を拝していると、人間はいのちの本源のよろこびに帰り着くだけでよいのだという気がしてくるのである。

先生には謎の部分がいまだにある。よくわからないのである。しかし、それでよいのである。底知れないのが人物の魅力なのであり、底が知れてはかえってつまらぬものである。

座談会を始めるとき、先生は、どんなに天気が良い日でもカーテンを閉めるように言われた。僕もカーテンを閉めるのを手伝つたものである。開けたままの方が、窓から自然な光が入って明るいものになあと思つたものだ。閉めるから当然の如く部屋が暗くなる。そして、電灯を煌々とつけるのである。大講堂の隅

の方で座談会をしたときも、先生ご自身の近くのカーテンだけでなく、講堂すべてのカーテンを職員の方に命じて閉めさせておられた。僕も「？マークを頭の中にいっばい浮かべながら手伝った。あれは何だったのだろうか？とうとう御生前中にはきけずじまいであった。

先生が帰宅されるついでに車で駅まで送って下さることになったときのこと、「ちよつと遠回りをしよう。」とおっしゃった。ところが、川上の方に向かった車はどんどん宇治を離れていく。こんなに遠くまで来て大丈夫かなあーと思ったが、ほとんど大津に近いところまで来てしまった。綺麗な水辺で葦のような植物の生えている景色のいいところまで来たのである。

「せつかくだから、少し降りましょう。」

と言ったのであるが、

「いやあ、めんどくさいネー」

とおっしゃり、突然ハンドルを切って踵を返すようにUターンしてしまった。あれも、何だったのだろうか?? 今度、あの世で会ったらきいてみたい。

榎本先生は、時々、ドキッとさせられるようなご指導をされた。

ある座談会でのこと、ノイローゼのような女性が、か細い声で何か質問した。何を質問したのかは聞き取れなかった。先生は即座にお答えになった。

「神がわかる必要はない。わかっただけから生まれて来たんじゃないんだから。」

また女性がかすれた声で何かきいた。

「神を信じる必要はない。神の方でこちらを信じてくれているだけで十分だ。」

と平然としたものである。多分女性は信仰への疑念をもらったのであろう。このとき、先生の中に巖の

ように堅い信仰の実体を感じた。静かな語り口だったのだが、忘れられないほど強い印象が残った。

幽斎殿の一階のテーブルのところで、僕は前から気になっていたことを先生に尋ねた。お世話になった予備校の先生が、唯物論者だったからである。様々な宗教書を読むと、唯物論者は死後地獄へ行くとか、無意識界で眠り続ける、と書いてあったからである。

「以前お世話になった予備校の先生が唯物論者で、神は無いと教壇で豪語していました。彼は死後どうなるのでしょうか。」

榎本先生がお答えになって曰く、

「神様は唯物論者を通して、私は無いよ」と消えておられるのだよ。そこに無我なる光があると思うね。」

先生はどこにも闇を見ておられなかった。唯物論者の中にさえ、聖なる光を拝まれる先生は、まことの光一元の師であると言えるだろう。

先生とお会いした最後の日のことである。幽斎殿の祈願室のところで、「宇治の名木百選」というビデオを先生に頂いた。樹木を愛されていた先生のことだから、さもありませんという感じであった。先生は木々に顕れた神の生命をひたすらスケッチされたらしい。そして、それらをビデオ撮影されたものだそうである。その日は時間がなく、すぐに、先生と車で駅の方へ向かった。京阪宇治駅前で、車に乗られた先生と握手していただいたのが、今生の別れとなってしまった。

しかし、これで本当に最後ではないのだ。

生命は永遠である。

いつか時の輪の接するところで、
またお会いできると信ずるものである。

〈後記〉榎本先生のご生前、僕は礼状一本書いたことがなかった。(酒は何本も持っていったのであるが……)それが今回少し多めに投稿しているゆえんである。先生は、気取らなかつた。飾らなかつた。威張らなかつた。自分は堅く信じていても、それを人に押し付けようとしなかつた。先生のようにであるか——と問いかけつつ、地上の歩みを続けていこう。

2 鼻血を出しながら一喝され：練成会にて

東京都杉並区 増田 義彦

今から十八年前、宇治一般練成会に初めて参加した時、確か三日目か四日目でしたか、知り合った友人二、三人と、講話中に別室にて話をしていましたら、榎本先生が音を立てることなく静かに入ってこられました。これはサボッていておこられるかな、と思いましたが、物静かな口調で、行事には予定されていない特別なお話をして下さいました。

とても短いお話でしたが、「皆さんは、始めの始めから“光”そのものであったのですよ!!!」と、ニコの絵を描き、大声で力説された。

その時のことです。私はわけもわからず、「ワー」とむせび泣きそうになりました。ドツと泣いてはいけなないと、一瞬こらえましたが、その言葉を頂いた時、心の底から頭のとっぺんまで、一瞬に、喜びが“ウツ”とこみあげてしまい、こらえたものの、涙がにじんでおりました。

その大声の一喝をされた時、私のムセカエル喜びが一瞬こみあげたその時、先生のお顔がまっ青になり、鼻血が片方の鼻から流れ出したではありませんか。私はふとアブない、と思いました。先生は指でそつと血にふれて血の指を見られたあと、何事もなかったように静かに出ていかれたのです。

私は、自分の中からこみ上げる温かな喜びを感じながら、先生の鼻血を出されて決死の思いで話された数分のお話の感動やらで、身動きできずにはばらく座ったままでした。その後、残りの練成が、十日目の

最後までとても楽になりました。その予定だにしていなかった数分のお話で、心のくもりがふき飛んでしまったのです。

練成後に、仕事で短期間ニュージールランドに行くことになり、先生にお便りした時、覚えていて下さり、期限の書かれていない「人形」^{ひとがた}を送って下さり、「身につけておくといい」と言っておきました。

先生にお返しできたことは、練成後半、たまたま二人だけのお風呂で背中を流させていただいたことです。背中を流して洗っていると、「ありがとうございます」と言いながら、先生は合掌されていました。そのお姿に気づいた時、私も「ありがとうございます」と言っていました。

先日十八年ぶりに、「榎本恵吾先生を偲ぶつどい」で、先生にビデオ映像の中でお会いでき、おまけにそのDVDを頂けて、先生と共に一生いられます恩恵に浴せましたことを、感謝をいくらしでも感謝しきれぬ思いでいます。先生の描かれたスケッチ、絵などにも触れられ、幸せでした。

多くの宝物を、大切にしていきます。ありがとうございます。

合掌 再拝

3 「救いの原点」をお話しくださった先生

京都府城陽市 山岡 紀子

一年祭に際し、DVDで榎本恵吾先生のご講話を拝聴させていただきました、懐しく、改めて大感動いたしました。入信以来、私と娘の運命を変えてくださった生長の家。特に、藤原先生と榎本恵吾先生の「現象ナシ、実相独在、既に救われ済みの神の子である、そのままの自分を無条件に今よろこびなさい」という生長の家の根本真理によって、本当のよろこびをいただきました。

そしてまた、これを聴かせていただくの楽しみに、よく宇治に行かせていただきました。自分を喜べなかつた暗い娘が、よろこびいっぱい輝いて帰ってくるようになり、家族のよろこびとなりました。

恵吾先生は、谷口雅春先生を心から尊敬され、先生のお説きくださった真理をわずかでも劣化させる事なくお伝えしたい、という強い志をお持ちになつてるのが解りました。いつも、はじめのはじめの救いの原点に引き戻してくださいのがうれしかったです。いつもご指導いただいた帰りには、心が解放されてよろこべる自分に戻り、うれしさいっぱいで帰ります。

あるとき急に七キロも痩せて、甲状腺ガンと判り、手術の方向に話が進んで、ご指導をいただきました。「先生エライものが出ました」と甲状腺ガンを告げますと、「大丈夫ですよ。今笑いながら入つて来てください。体験になりますよ」と言い切ってくださいました。深いお悟りがなければ言えない言葉だと思いました。

その日は「山川草木国土悉皆成仏、有情非情同時成道」をお説きくださり、先生のトレードマークのニコニコ顔をお書きくださり、周囲に「現象即実相、〇〇即〇〇……」と、いくつも書いてくださいました。一切の現れを善ととり、ただ感謝し、そのままの自分をただよろこび、心晴れやかに笑いながら帰りました。

一子先生からは、「大丈夫ですよ。出たものを何とかしなくとも影なんですから、私だったら手術しませんよ。神様は常に護ってくださいていますよ」との力強いお言葉をいただいて、大安心の境地に入りました。そうしてガンを放すことが出来、大好きな愛行と行に没頭する事が出来ました。それから三ヵ月後、主人に言われて検査をした結果、プラス反応が出なくて、両方にあつたかたまりも後に消えてしまい、今改めて感謝の気持ちいっぱい、自分の使命を深く感じています。

雅春先生が、「私は一人も救ったことはありません。はじめから救われているのです。それを拝ませていただいていたら、気がつくと自分が拝まれていたのです」とお話されたことを知ったとき、「まさに恵吾先生は『救いの原点』をいつもお話してくださっていた」と気づかせていただきました。

恵吾先生独特の楽しい表情や、お一人お一人を菩薩様と礼拝してくださっているお心がにじみ出た、深いお悟りのお話は格別のものでした。一子先生の、常に神と共に生きていらっしゃる力強い信念と、愛深さと、直感力のすぐれた妻であり母でいらつしやったことが、恵吾先生のよろこびであつたに違いありません。

榎本恵吾先生は、最高のご家族に恵まれた、お幸せな先生だったと思います。改めて、生前お世話になりましたことを、心よりお礼申し上げますと共に、ご家族の方々の益々の御健康とご繁栄を、心よりお祈り申し上げます。

再拝

4 あたたかい榎本先生のお導き

京都府宇治市 畑本 宏実

(一)

合掌 ありがとうございます。

榎本先生には、数えきれないほどの御愛念をいただきました。この数日、それが次々とよみがえってまいります。メモに書き留めております。

私は、研修生(注)を四回もしました。あるとき、家に帰ってしまっていたけれど、もう一度本山で世話になるため、母と本山に戻った際、榎本先生が母と私に休憩室でお会いしてくださいました。そのとき母が、「この子は榎本先生が大好きで、先生によくしてもらった話ばかり、家でもするんですよ」と言いました。すると先生は、

「(宗教は)人情ではないんですよ。人情の世界ではない。神様に生かされているということですよ。というように言われました。」

先生は、ちつとも「自分が世話をした」というような態度はされません。本山に来るまでの私は、誰も自分のことをわかってくれる人はいないと思い、愛情に飢え、ひねくれてしまっておりまして。榎本先生を通して、神様のあたたかい無限の愛を感じ、今ではこうして結婚までして、本山にいられることは、夢

のようです。

思えば、何も知らないまま、年末の大浄心のための練成を受け、偶然、個人指導をしていただいたのも、榎本先生でした。

心を開くきっかけになったのは、研修行事での榎本先生の聖歌練習でした。音楽の大好きな私は、歌のたびに心があつたかくなり、ありがたくて涙が出ました。魂が開放される喜びを味わわせていただきました。

私が賄係として、前の中講堂で奉仕をしていました頃、ある日の午後の休憩時間に、二階のピアノで、『エリーゼのために』を弾いておりました。すると、榎本先生が戸を開けて入ってこられて、「誰が弾いているのかと思つたよ。ピアノの音が聞こえて、あなたは僕の音の出し方と似ているねえ」と言われたのを思い出します。あのときはとても嬉しかったです。

榎本先生の幽斎殿の神想観に毎日通うのが、何よりの楽しみであり、日々の心のよりどころでした。先生が出張か何かでその神想観の無い日には、家から一步も出ないで引きこもって、先生の神想観のある日は、心弾んで通いました。神想観後は、身も心も軽くなりました。

私は、幽斎殿のマイクのコンセントをセットしたり抜いたり、電気のスィッチをつけたり消したり、クーラーの設定などを、その都度させてもらっておりました。神想観後、先生は、いつもそこにいる私に、一言、二言、話しかけてくださいました。話をするのがあまり上手でない私に、いつも先生の方から、やさしくニコニコと、話しかけてくださいました。

最後の山登りになった伊吹山のこと、その何日前、神想観後に、「十四日（山登り）は、台風でも嵐でも行くからね」と、笑いながら言われました。伊吹山は、その日、時間も早かったせいか、私たちのほかに一、二組いるだけで、ほとんど貸し切り状態でした。頂上で少しビールを飲み、少し降りた所で、

皆で奥様の作ってくれたおにぎりとおかずをいただきました。先生は、ニコニコされながら、奥様がおにぎりを作り出したら、「楽しくておもしろくて止まらないらしくて、次々にいっぱい作ったんだよ」と、何度も言われていました。本当に楽しそうに何度も言われました。

榎本先生がお亡くなりになられる前は、出張などが続いて、先生が本山におられないことが多くなりました。私は先生がいけないということについて、自然に考えるようになっていました。

ある日、インスピレーションのように、「肉体の榎本先生に頼ってはいけない」と出てきました。毎日、先生の神想観に通っているのに、ちょっと先生がいなくても調子をくずしたりしていたのでは、毎日通っている意味がない、榎本先生に申し訳ない——と思いました。これからは、榎本先生の愛念を通して、神様の無限の愛を信じるようにしていこう、と思いました。

今から思えば、榎本先生がお亡くなりになっても、私が戸惑わないでいられるように、先生が導いてくださったのだと思います。不思議なことですが、先生がまだお元気なのに、この何カ月か、時々こうして奥様にお手紙を書いている自分が浮かんできました。榎本先生がお元気なのに、どうしてこんなことを考えるのか——とっております。

榎本先生に、本当に良くしていただいて、沢山の楽しい思い出を、これからも、メモに残していこうと思っております。本当に、ありがとうございます。

(注) 研修生…生長の家宇治別格本山の道場に、長期間住み込んで奉仕をしながら研修を受ける受講生のこと。
榎本先生はその研修生の指導を担当しておられた。

何年か前の冬の夜、歌の仲間達を、榎本先生の御自宅に寄んでくださり、奥様の鍋料理や四女の妙子ちゃんの手作りのスコーンをいただいた時のことです。誰からともなく環境問題の話題になりました。その時、榎本先生が、「環境問題も大事だけど、あれもだめ、これもだめと、小さく縮まっていくんじゃないかって、諸君達には 創造する生活、生み出す方向に生活していつてもらいたいものだね」とおっしゃいました。私にはその言葉が非常に印象に残りました。この頃あの言葉が、私の生きる指針になっています。

先生の奏でる和音が好きでした。榎本先生は、

「和音というのは、一つ一つバラバラの寄せ集めじゃなくて、〃一つ〃が先で、そこからさきはえて一つ一つの音になっていくという感じで弾くと、なんとなくいい感じになるんですよ」という風によく言われていました。先生の弾かれる和音というのは、ガチャガチャした感じが全然なくて、一つ一つの音が納まる所に納まったような大調和の音だなあと、いつも思っていました。

私は長い間、暗い煩悶の生活の中に居たので、初めて聖歌練習に参加した時、今までの生活とのあまりのギャップからか、歌うのに苦しくてなかなか思うように声も出せませんでした。そして練習が終わった時、先生が近づいて来てくれて声をかけてくださり、肩をポンとなでていつてくれました。その時、ああ、先生は、今まで私が苦しかった事も歌が好きなの事も、全てわかってくださっている……と感じました。

いつからか、先生は私に、『アルト』を担当するように勧めて下さいました。それからは歌の度に、「アルト、アルト」と言っては私の顔を探して下さり、「こっちこっち」と、アルトの位置に促してくれました。その度、大切にしてくださいってありがたい気持ちでいっぱいになりました。普段は引込み思案で恥ずかしがり屋ですが、楽しさと喜びと、自信のようなものを導き出して下さいました。先生の歌の集まりは、

下手なものを上手にため直していくというような観点からは逆の極点にあり、「そのままよい」ものの、魂の開放だからだと思います。

先生の愛念とか思いというのは、本当に神そのままに、至大無外 至小無内に、無限に大きく拡がり、又内には、接する一人一人の心の思いや傷を暖かく細やかに包んで下さいました。

先生が亡くなられる一月前、山登りの前日（六月十三日）に、我が家の玄関まで、初めて先生と奥様がわざわざ訪ねてきて下さいました。妙子ちゃんの結婚の内祝いの陶器を持って来てくれました。そして、玄関に飾ってある、先生の『自性合掌』と書かれた書を見られて、

「ははあ、飾ってくれてるねえ」

と喜んで下さいました。その頃私は、家の近所の、引きこもりがちの青年から言いがかりをつけられて、憂鬱な気分でした。先生にその青年の事を祈って下さいました。先生は、玄関を閉じられた後、近所一帯を祝福するように少し歩いて回って下さっているようでした。それが私への最後のあいさつとして来ていただいたんだなあと今になって思われ、本当にありがたいです。

七月十二日の夕刻、主人がいつもより一時間程遅く帰宅しました。「榎本先生が調子が悪いそうなのでお見舞に行つて来た」とだけ言いました。そして、主人は、近所に住む本山員で、先生と特に親しい方達に一応知らせると言いました。私は、それじゃあ明日の神想観はないかなあ、ぐらいに思っていました。そして普通に夕食を食べ、二人共いつの間にかうとうとうた寝をしていました。

夜八時頃、電話の音で、我に帰りました。同じ神癒祈願部の方から、

「榎本先生が危篤状態になった」

と知らせていただきました。私はびっくりして顔が真赤になってしまいました。

不思議だったのは、目覚めた時、何とも言えないような、神様に包まれているような、心安らかな暖かい気持ちで目覚めたことです。主人も私もそんな感じを受けました。それはきつと、榎本先生の魂が家を訪問してきてくれて、祝福していつてくださったからだ……と直感しました。

榎本先生には、私が何か心配事や悩みがある度、祈っていただきました。よく主人に、

「先生に祈ってもらおうようにお願いして」

と頼んだものです。本山内のため、神癒祈願も手渡ししていたでいて、その封筒にはいつもニコニコの絵と、一言を書き添えてくださいました。

最後の月に書いてくださった言葉は、『自性幸福』でした。これからはこの言葉を胸に生きていきたい……。

先生がお亡くなりになり、一年以上経ちました。始めは、シヨックが大きく、不意に涙が出ましたが、それから月日が経つうちに、榎本先生が、全ての人や事物を祈ってくださいているのが確信されて、日々先生とともにある、という感覚で過ごさせていただけます。

幽斎殿の神想観があった十時と一時の、特に神癒祈願の祈りがあった十時二十五分と一時二十五分頃になると、何をしていてもふと、時計に自然に目が行って、「あ、またこの時間だ」と気付くので不思議です。

また、先生がお亡くなりになり、心が塞ぎ、生活に摩擦が起きそうになったり、迷いが生じて来ましても、近くの縁のある神社でおみくじを引きますと、その度まるで先生からのメッセージと思われるような御言葉が出てきたりして、おかげで、踏み外す事もなく、喜び、祝福の日に変えていつていただいております。

ます。本当にありがたいです。榎本先生のお導きは今も続いていて、全ての人を暖かく守り導いてくださっておられるのでしょうか。ありがとうございます。

合掌

《追記》

ある時、先生は練成講話の中で、

「練成の練は『糸へん』、鍛錬の錬の金へんではない。金属のようにたたき直されて良くなるのではなく、糸というのは始めからずっと変わららず同じ太さで、練成に来る前から帰ってから、ずっと同じものが続いている」と言われていました。

それを聞いて、なんだか嬉しくなりました。

以前、個人指導で榎本先生が話してくださいました。

「花は、ただ咲いているでしょう。自分から、どうです、私きれいでしよう、と花のほうからは言っていない。花はただ喜んで咲いているだけでしょう。その喜んでいる姿を見て、蝶ちよが嬉しくて飛んで来るんですよ。」

当時、一度別れを経験し、心が淋しさでいっぱいだったあの頃、私の心を優しく諭すように……。

初めて研修生になる前には、

「本山に光をもらいに来るんじゃないかって、あなたが、本山に光を与えるということなんですよ」

とおっしゃってくださいました。

近頃は、ただ単に神癒の祈りの時間に時計に自然に目がいくというだけではなく、偶然にも、家事など何かしていて一息ついた時とか、ほっとしてお茶などを飲んでいる時とかに不思議と重なるのです。それ

は本当に、あくせく過ごすことからほっと自分が解放され、許された時間と重なるのです。榎本先生が、
「ゆっくりしてもいいんだよ、許されきっているんだよ」と言ってくださっている気がします。

（本当の）自分を大切にね」と……。

5 夢の中の榎本恵吾先生

東京都青梅市 久都問 繁

(生長の家本部講師)

(友人宛の書簡より)

合掌、ありがとうございます。

畑本さんのお父様の訃報をお知らせくださり、ありがとうございます。

九月九日の明け方、榎本恵吾先生が私の夢の中に出てきました。

このようなことは初めてだったので、夢から覚めた後も、そして今も、先生の懐かしい魂の響きが、私の心の奥底でこだましています。

夢をみている最中、ふと気がつく、榎本先生がありありと目の前にいることに、私はとても驚いていました。そして周りにいた知人の何人かに、ことの重大さ呼びかけてみましたが、皆さんは「ごく当たり前のこと」といった様子で、さして驚いているようではありませんでした。

私は懐かしさのあまり、「今のうちに何か大切な話をしておかなければ」と、生前にしていたように先生に呼びかけてみましたが、いざお話ししようとしても、具体的な言葉が見つかりません。

それでも、私を見つめてくださっている先生に、「このまま進んでいいのでしょうか」というような意味のことをお訊ねすると、先生は、私の「いのち」そのものを、慈愛に満ちた魂の眼で真っ直ぐに見据えて、「そのままでもいい、そのまま光りだよ」と、私の実相のみを相手にして見つめてくださっていること

が伝わってきました。

先生はすべてを察していらつしやる、と感じた瞬間、限りない懐かしさがこみ上げてきたのです。そのほかにも、いろいろな話をしたようですが、もう覚えていません。

今朝の出勤の際、電車の中でこのときの情景をずっと想起していたのですが、夢の中で私がしたことは、先生に向かつて、ただコンコンと戸を叩いたことだけだったことに気がつきました。

イエスは聖書のなかで、「求めよ、されば与えられん。叩けよ、されば扉は開かれん」と説いていたことを思い出します。

生前も、今でも先生は、ただただご縁のあつた渾^{すべ}ての人々の実相を拝んでいらつしやるのだと思います。「忘れないうちに」と思い、書き留めさせていただきました。

(二〇〇六年九月十二日)

6 “脳内清掃” をしていただきました

宮城県仙台市 川島 郁子

定年退職を期に、伊勢神宮を参拝した友人二人を宇治別格本山に案内し、一泊。翌日、大阪の友人を交えて、四人で幽齋殿に参拝しました。

神殿の前に座っていると、突然、榎本恵吾先生がいらつしやり、神想観の座につかれました。

「今は、神想観の時間ではないけど、緊急に祈らなければならぬことがあつて——。あなた方も、何か祈ることはありませんか？」とおっしゃった。突然のことで、何も頭に思い浮かばなかつたので、四人は黙つて先生の前に正座し、先生の神想観に合わせて祈りを始めたのです。

すると、静寂な神想観の中にあつて、私の頭上に突如、ハエかハチがビュンビュン音を鳴らして飛び交つているようでした。目を開いて手で追ひ払おうと思つたのですが、榎本先生に失礼と思い、そのまま神想観を続けました。

やがて私の頭上にハエかハチが止まつたと思うやいなや、頭から脳の中、鼻の奥の中心まで、グルグルと逆円錐の形に振動を続け、榎本先生の神想観終了と共に、その不思議な振動もピタリと止まつたのです。

榎本先生と一緒に祈りをして、「脳内清掃」とお浄めをしていただいたことに感謝合掌。老眼鏡なしに読書が続けられるのも、きつと先生のお陰であると、感謝申し上げます。

それは忘れもしない、二〇〇〇年五月十九日、午前のことでした。

感謝合掌

7 雲の上で寝ているようでした

石川県金沢市 小塚 弘子

第六百回神性開発宇治一般練成会に参加したときのことです。

夜、最後の恵吾先生の御講話のときでした。先生は、はじめに

「今日は皆さんに実相世界の雰囲気味わっていただきたいと思つて話します」

と言われました。

先生のトレードマークであります「ニコニコ笑顔」が、黒板からはみ出して大きく書かれ、色々と笑わせながら話して下さいました。

私はその、先生の言われます「実相世界の雰囲気」とはどんなものなのか、とてもとても興味一杯で聞いておりました。

そのうち「びよこん」と、何だか霊のコンベアベルトに乗ったように感じ、とてもふわふわした世界へ連れて行かれました。そんな感じのまま、講話も終り就寝の時間となりましたが、その晩は一晩中、これまで経験したことのない、無限にふわふわした雲の上で寝ているようでした。

あまりにも感慨が深く、翌日、一子先生に話しました。

研修生として残った私は、後日、大祭のときに、恵吾先生と直接話す機会があり、その話を再度させていただきます。

恵吾先生は、すごく興味を持たれ、「どの話をしたときにそうなったの？」とか、「どういう風に話しているときでしたか？」と、細かくお聞きになりました。そして、恵吾先生自費出版の『裸Ⅰ・Ⅱ』という本をいただいたのもそのときでした。

大祭が無事終了した晩のお食事会のときも、私の経験を「新鮮だ!!」と言って下さり、本当に、本当に、嬉しい思い出となりました。

現在は、一子先生から頂戴いたしました、恵吾先生のご講話のDVDを何回も何回も聞き直して、私の魂は救われました。

今でも時々、恵吾先生の雰囲気を感じ、お導きをいただいております。恵吾先生、本当に、本当に、ありがとうございます。

去年七月、命日祭のため、宇治へ出かけました。恵吾先生の大好きなお茶を買い、お会い出来ることを楽しみに出発しました。宇治に着きますと、所々に『故榎本恵吾……』という立看板があり、意味が分かりませんでした。練成道場の中で尋ねてみて、はじめて突然に先生のお亡くなりになったのを知りました。一子先生は、恵吾先生の「お相^{すがた}」に会わせて下さいました。静かな美しい「お相^{すがた}」でした。まるで生存中そのままの恵吾先生に会わせて下さった自然さで対して下さいました。今思うと、まるで神の国そのままの光景でした。

今になって考えてみますと、榎本恵吾先生は、神界へ旅立たれるギリギリのところまで私をお救いくださいただったのだと思えて、ただただありがたく、感謝ばかりです。

榎本恵吾先生に出会えましたことに、神を思います。先生にお会いできてからの私の世界は、一変いたしました。先生の遺されたDVDで何回も学び、はじめて尊師の教えにはいれたと思います。

生かされている自分の生命がこんなに嬉しいこと、ありがたいことを、はじめてわからせていただきました。私も本当の幸せにはいれたと確信いたします。

榎本先生!! 本当に本当にありがとうございます。先生が私たちに伝えてくださいました真理を、今度は、お救いいただいた私たちが、生命がけで一切の人たちにお伝えさせていただく番です。

先生、やります。先生の後に続きます。どうぞ、天界で見てくださいね!!
ありがとうございます。

合掌

8 風となり雲となりて

東京都青梅市 久都間 育代

「先生」。心の中で語りかけると、

「どうかね」と、懐かしい声とともに温かな笑顔を思い起こします。

はじめてお会いしたのは、昭和五十九年四月。十九の春でした。養心女子学園で、決まっていた総本山への内定を急ぎよ取り下げ、宇治別格本山に奉職することを願った私は、なぜ、どうしても宇治へ魂が引かれるのか、自分でも理由が分かりませんでした。しかし先生にお会いしてはつきり分かりました。私の魂は間違えていなかったと。

先生、奥様、ご家族、先生の研修生。この方たちと会うために、私は此処に来たのだ——そう思いました。

奉職後、受付係をしていた私は、ある初夏の朝、先生からの電話を受けました。

「奈良線の奈良行きは何時があるかね」

それに応答した後、すぐに公衆電話へと急ぎました。

「先生、私、今日お休みなのです。誌友会に連れて行ってください」
自分でも思いがけない大胆な行動でした。

こうして初めて、先生と一緒に奈良の王寺で開催される誌友会へと、喜んで宇治駅に着くと、そこには

もう一人来ておられました。久都間さんでした。彼も「先生と二人で行ける」と思つて来たら、もう一人いたと。少し残念に思つたようです。

奈良行きが電車到着し、車両に彼と私が同時に乗つた時、先生は「この二人は結婚する」と直感された、結婚してしばらく経つた頃にお話しくださいました。

先生に付いて、二十から二十一歳の頃は、西宮の前波邸で毎月一回開催される誌友会に通いました。いつの間にか久都間さんも通うようになり、これも先生が自然に敷いた縁であつたのです。

ある日の朝、食堂でお会いした先生に、

「久都間さんが、自分で書いた原稿用紙を、束にして持つて来られました」

と言いますと、先生は実に嬉しそうな、これ以上の悦びはないとばかりに喜ばれ、

「そうかね。彼はもつてきたかね。そうかね」

と満面の笑みでした。

先生と奥様が、私たちの結婚祝賀会で「植生の宿」を歌つてくださいました。その歌声を聞きながら、この結婚をご縁として、何らかの形で生長の家のお役に立ちたいと希ねがつたものでした。

後に先生は、研修生出身のある方が宇治本山を退職されることになつた時、こうおっしゃいました。

「私はねえ、研修生の一人ひとりにアコヤ貝の真珠の核のように、一人一人のお腹にしつかりと『神の子』の教えを植え付けたんだよ。それは本人が外そうと思つても、ジタバタしても、もがいても決して外れない。だからね、彼は本山を辞めても、どこに行こうが、大丈夫なんだよ」と。

私が十九から三十五まで宇治で過ごした十六年、あの先生のもとで送つた日々は、全て神様から与えられていた――。コンクリートの固い裂け目から、草花が咲く。その土台となるやわらかな土を先生が用意

してくださっていた。自然に咲いたと感ぜられるように。

先生がお好きだった『まあだだよ』（黒澤明監督）の映画。あの中で教え子たちが「先生は金無垢だ」と話していましたが、先生もそうでした。そして「純粹無垢」でありました。今年は先生と奥様の古希のお祝いをと、あの映画での場面のように思い描いておりました。

最近読み終えた本で、『博士の愛した数式』というのがあります。その博士は八十分経つと、記憶が消えてしまう。八十分にすべてが凝縮される。そして次の八十分が始まる時は、また新たな驚きから始まるという話です。その数学博士は、自然数の中の「素数」をととも大切に思っています。他の整数では割り切れない、そのまま成り立っている3、5、7、11……こんなに美しい数、「素数」と。

主人が、「この小説に出てくる博士が、先生とそこはかとなく似ているね」と言っておりました。

先生がお話される時、書をかくとき、雲や風景の絵を描かれるとき、作曲をされる時、「素数」のごとく、本当にひとつのものを愛おしむが如く、大切に大切に紡ぎ出していかれました。

一昨年秋の慰霊祭で、谷口雅宣先生が

「たとえ肉体は滅したように見えようとも、ご家族やご縁ある人々を、小石となり草木となり風となり雲となつて見護つてくださる」

と話されました。そのお言葉を今、深く感じています。

ゆく雲に

流れる水のささやきに

ともに歩みし山の辺おもいて

青き空

風の流れに響く歌

師と口ずさむ “きれいなきれいな”

山は緑

空に映えたる夕雲に

“きれいなきれいな” 歌は風となり

9 わが内なる「先生」

東京都三鷹市 大谷 敦子

尊師 谷口雅春先生が生きられた真理の継承に、いのちをかけた、そして体現者であられた、榎本恵吾先生とめぐり逢えた事は、尊師が昇天なさった後の私たちに、大いなる恵みでした。

榎本恵吾先生は、全身全霊をもつて、谷口雅春先生のお悟りの喜びを、ご自身がそこに立たれ、語って下さったのでした。「谷口雅春先生がいのちをかけた教えだったのだ。」と講話の中で語られた先生の言葉の響きが、今も、生き生きと私の中に鳴り響きます。

榎本恵吾先生の内からのお話（表現）は、谷口雅春先生をも、新しく感動させるような、驚かせるような、新しい萌芽を感じさせるものでした。

先生はそのよろこびを語る時、真理そのものとなって輝き、その喜びを、先生の目の前に現われた続べてのものに伝播していかれたように思います。光が光を呼び、光溢れる世界を、真に、創造し続けていらしたように思わせて頂いております。

もつともつと、先生の御許に行きたかった。もつともつと先生のお話を聴きたかったし、先生の眼差しに浴したかった私ではありませんが、恵吾先生がなさった「尊師がなさった山口悌治先生への弔辞」のお話の如く、そして、やはり恵吾先生がなさった「尊師のご昇天の意味するところ」のお話の如く、何ものにも依存することなく、神の子として、今ある生を飲み、何ものにも悔悟することなく、完き肯定の中、光

輝燦然と、ただ、進み行くことが、先生への唯一のお礼でしかないと思っております。

このようなことを、思わせて頂ける大いなる恵みに、こころより感謝を捧げます。
ありがとうございます。

(一) 榎本恵吾先生との出逢い……先生の講話は華厳経

初めて先生とお目にかかったのは、平成十年一月の一般練成会でした。

その頃、特別悩みも無く、本も読み、青年会活動もしていたのですが、いまひとつ神の子という実感がわかず、何かそのところで、「宇治に行ったらいいのではないかなあ。」と、ただその思いだけで一般練成に参加しました。初めての十日間練成を、榎本恵吾先生のいらっしゃった宇治で受講できたことは、最高の恵みでした。

先生は、私の疑問に思っていたこと全てを、まるで私のためだけに話して下さいたかのようにでした。体験談はまったく入っていない、ただ、先生が今立たれているところを、先生がなさったどの講話表現にもダブることなく、多種多様な、変幻自在な、選り抜かれたびつたりくる言葉で話して下さいたのでした。

その頃練成部にいらした恵吾先生の講話は連続しており、生長の家が生長の家たる、實相独在のお話を聴くには、最高の場となっていました。結語も先生がなさり、「ありがとうございます」を言霊から説明して下さいました。結語の後の万歳三唱も、先生は喜びを全身に表現されて、ゴムまりのように丸くなって飛び跳ねるような感じでした。

私は先生の講話をひとつずつ聴くほどに、啓かれていった気がします。練成中盤頃、「向かうところ敵無し」とか「金剛不壊」とか、講話中に無い言葉が、ポツリポツリと私の中に浮かんで来るので、自分で

も面白く思っていました。

九日目の朝の先生の「人類無罪宣言」の講話中、私を取り巻く全宇宙から（内から外から全てから、境目無く湧き出すといった感じ）、「罪は無いんだあ。生かされている。神なんだあ。」という響き（という表現がもつとも近い）が起こり、包まれ、喜びのあまり、半日涙が止まりませんでした。見えている世界は変わらないのだけれど、別の次元に立つてしまったような、とてつもない祝福を味わわせていただきました。本当に物凄く幸せな体験でした。一呼吸一呼吸に感動する日々が続きました。幸せの中を歩く、幸せの中を動くといった感じでした。思いもよらず、實相独在だったんだあと、実感させられた、大いなる出来事でした。

その年の七月、先生は祈願部に移られました。

そのはじめての大祭の奉仕を、幽齋殿でさせていただきました。その時、先生が、今日、大祭当日に思い浮かんだ曲ということで、B5判位の用紙に楽譜と縦書きの歌詞が書かれたものを、見せてくださいました。細い黒のペンで書かれたものだったのですが、その線の美しさ多様さ裕かさゆたに魅了されました。線はうねるように、回るように、踊るように、全てのペン先が余すところ無く、活躍しているといった感じだったのです。

私はその楽譜を見たときに、大きく拡大し、布に染め（私はいちおう染色家です）、色付けした作品に仕上げたいと思いました。以前から、楽譜を染めてみたいという思いはあったのですが、具体的アイデアにはいたりませんでした。それがこんな形で訪れるとは思ってもありませんでした。先生のそのペン書きの楽譜を観た瞬間、その出来上がりがイメージでき、その作品を先生が喜んで下さることも想像でき、嬉しさがこみ上げました。作品を先生の九月の誕生日に贈り、驚かそうと考えた私は、先生にはそのこと

は告げず、ただ、そのコピーを頂きました。

後日、一对の額装に仕上げ、贈り物とさせて頂いたところ、いのちを震わせて喜んで下さったかのよう
な、巻紙の礼状を頂きました。そのお手紙は、宝物になっています。ありがとうございます。

(二) 原宿本部の日曜講話で

それは平成十年三月の原宿本部での日曜講話でのことでした。

榎本恵吾先生の講話は、あたりを澄み切った輝きで満たしてしまいました。

その日は、その頃まだ同じ原宿に居を構えていた、東京第一教区の講習会が間近で、受講の推進のため
の奔走か、目に見える人は本当にまばらでした。でも先生はすべてのものに、全宇宙に向かって話すか
く、制約の無い広々としたところで、大いなるものに導かれてお話をなさっているようでした。

本都会館ホールという、尊師と直にふれあった、想いの鮮明な場所での講話は、果てしない美しさ
もっていました。尊師の立たれていた同じ場所に立たれている恵吾先生のいのちは、知らず知らず尊師と
ひとつになった喜びを、いのちを震わせながら味わっているかのようでした。そして自分無き自分が喋っ
ているような感じでした。まったく自分が無く、真理そのものとなっていていらっしやいました。もともと色
の白い先生でいらしたが、何か発光体のように感じられました。

お話の内容は、尊師との直の融合、服部仁郎先生、吉田國太郎先生とのことなど、練成会ではあまり話
されないような、先生の歩みの指針となるような出逢いの、端的で鮮明なお話でした。

講話が終わり気づいてみると、会場にいらした方はみんな、喜びと嬉しさで、涙をこらえきれなかった
ことがわかりました。

演壇脇の通路に先生が下りていらした時、みながその素晴らしさに喜び、取り囲むような形になりました。

演壇から降りてらっしゃる先生は、「またこんな講話をってしまったか。」と、畏れ、大いなるものみ前にひれ伏している感じでした。その時もまったく自分が無く、見事に透明でした。光による陰影によって先生のお顔のかたちが判断できるといっても、陰影なしの、内からの光の強弱で先生の形を作っているといった感じでした。その透明さについて、その時はぴったりとした表現が思い浮かばなかったのですが、ある時ピッタリの表現をみつけました。先生は透明で、その時私が手を入れたら、手が突っ込めそうな感じだったのでした。

この不思議は、今も鮮明に私の中に厳然とあるのです。このことだけでも、先生とお目にかかれた恵みの大なることを感謝せずにはいられません。ありがとうございます。

(三) 最後の握手……微妙な会話

宇治で先生の側で、もっと勉強したいと考えていた私ではありましたが、平成十年の秋に母が昇天し、その後、母の母の介護、そして家の建て替えと続き、私の未熟さ故に、先延ばしになってしまいました。先生が亡くなる一週間前、先生ご夫妻と、石田氏と、東京でお食事をした時も、おやさしい先生は、「家が建つたらまた宇治に来てね。」と私を促して下さり、私も「必ず行きます。」と元気に即答したものでした。

そして、お別れ際に握手して頂きました。その時、手を離そうとした私の手を、先生は引き戻すようにまた握手されたのです。いつもの先生の握手と、全然違う感じがしました。とても、なつっこい印象の

握手でした。いま思うと、「頑張るんだよ」と励まして下さったのだと思われてなりません。先生……、本当にありがとうございます。

そしてまた、その別れ際に、先生ご夫妻で立たれている様子がなんとも言えずマロヤカで、物凄く清らかで美しかったのです。先生昇天後、一子先生にお話したら、謙虚な奥様は、恵吾先生だけが美しさを放っていたように受け取っていらつしやいました。でも、どう考えてもあの時の輝くようなマロヤカな美しさは、お二人で醸し出していられたように感じられて、ずっとそのことを考えていました。

日が経って思うようになりました。やっぱり恵吾先生の昇天を知っていて、でも……認めたくない、だから気づかなかつたように見えるけれど、魂的には知っていて、最後の濃密な時をお二人で味わっていたのではと、思わせて頂きました。結婚ということのまろやかな果てしない喜びに触れさせて頂けたように思います。

(四)「遍満」ということ……葬儀に向かう列車の中で

七月十二日夜十時頃でした。

電話が鳴り、宇治の祈願部に以前いらした方から、先生の訃報が告げられた。一週間前に東京にいらした時が、最期のお別れだとそのとき気づいた。

電話後、一時間ほど神想観をした。目を開くと、部屋が妙に明るく感じられ、悲しみも実感としてなかった。その晩はそのまま、ぐっすりと休んだ。あくる日は、関東ではお盆の入りで、父と午前中お墓参りに行くことになっていた。行く車中から悲しみが起こり、帰ってから、午後一番で宇治に向かった。

新幹線の中で『甘露の法雨』を誦げようとすると、気持ちがよくなくて、なぜかボーっとしてしまう……

…なので窓外の飛び交う景色を眺めていると、全てのものに先生の雰囲気を感じられる。ふと列車内を覗いても感じられる。それが宇治に向かうまでずくっと続いた。

なぜだろう……と、想いをめぐらした。

……先生のいのちは、遍満していたのでした。

先生は潔かった。高潔であられた。

先生は以前、講話のなかで、「さやけきものになりたい。」と仰っていらした。遍満ということが、こんなに強く感じられるとは思わなかった。先生が教えて下さったようにおもわれる。

ご自宅に伺ってわかったのだが、先生はすでに抜け殻だった。形を現している先生はそこに居なかった。やはり「遍満するいのち」になつてしまわれたのだ、と想わせて頂いた。肉体という制約のないところで、のびのびと大らかに、そして、せいせいしているようにも感じられた。

告別式の時の先生のお顔には、赤みが射したように感じられた。おやさしい先生が、縁ある人たちに別れをされるためかのようなであった。先生は最期まで全てを祝福し礼拝しつづけられた。ありがとうございます。ます。

(五) 服部仁郎先生の「祈願札」

「最後の握手」のところで書いた、先生が亡くなる一週間前の七月五日の食事会するとき、母が姉を出産する時に祖母が服部仁郎先生に書いて頂いた、今でいう「人型」を先生にお見せしました。家の建て替えのため荷造りしていた時、見つけたものでした。一〇センチ×三〇センチ位の大きさの和紙に、「光明思念 生命完全円満」と、母の名前・年齢、そして服部先生の名前が書かれ、落款が押されているもので

た。昭和三十年に書かれたものでしたし、大きさからいっても、祈願部が出来る前のものではないか、という話になりました。

若い頃に服部先生に学ばれた先生は、とても喜ばれ、「服部先生の字だねえ。」と感嘆するように仰り、コピーがぜひ欲しいという話になりました。食事が終わってから近くのコンビニでコピーをし、お渡ししようと思っていたのですが、先生と過ごす中にそんな時間は無く、その月の半ばに宇治に行く予定になっていた同席の石田さんに、持って行って貰うか、あるいは送るかしますと言うと、先生は、「今度来る時に持つて来て。」と仰いました。

ところがその週末、どうしても早くそのカラーコピーを送りたくなり、日曜日に本局に行つて郵送しようかとまで思いました。でもそこまでする必要がない気がして、とにかく、七月十一日、月曜日の朝一番で出すことにしました。そしてその時、「落花卉」という題のついた、春頃に買った日本画の絵葉書に、今までのお礼を書いて送つてしまいました。

その絵葉書は、とても美しく清らかな感じで、なんとなく、先生の雰囲気があつたので選んだものですが、あまりイイタイトルでなかつたので、お手紙するとき、少し躊躇しましたが、美しいし、先生は気になさらないだろうと思つてしまいました。でも後で考えると、その絵は、美しいピンクの花弁が落ちかかつて、かろうじて蕊しべに引つかかつている図だったのでした。肉体を去る時の図だったのでした。

そしてその祈願札は、先生が不調を訴えられて帰宅した日の夕刻に届いたと、後日伺い、間に合ったことの不思議を思わずにはいられませんでした。

先生は、手元に届いた祈願札を示して、「祈願に携わる者にとって、こんなに喜ばしいことはないね。」と、駆けつけていた祈願部職員の畑本さんに話されたそうです。そのことの意味を、いまだに色々と考えられています。

いつもと変わらない拝みと祝福をされ続けた先生は、生まれるという世界にいなかったもので、この世の最期と見えた時にも、この様に常と変わらなかったのではないかと思わせて頂いております。

いつもいつも身をもって教え導いて下さる先生に感謝をささげます。きつときつと、今まで先生とお目に掛かって、気づかなかったことも、これからまた分かって導かれることになるでしょう。

先生、本当にありがとうございます！

叔父が二十歳まえに亡くなり、祖父母が生長の家に触れ、父と母が結婚し、祈願札が書かれ、姉が生まれ、私が生まれ、そして時が流れ、祖父が亡くなり、母が亡くなり、祖母が亡くなり、家を建て替えることになり、服部先生の祈願の札が見つかり、榎本先生に届けられた。きつと、気づかないけれど、いつもこんな中を歩ませて貰っているのかも知れない。

(六) 幽齋殿でもの申す……答え

これだけ先生の側に行かせて頂きながら、いつも訊こう訊こうと思つて、そのままになっていた事があった。

七月十三日の夕刻、もうすでに扉が閉まっている幽齋殿の前で、私はその質問の答えを教える欲しいと、声を出して言った。先生の早すぎる昇天にも文句を言った。のびのびと文句を言えるような自分に、先生がして下さったように思う。

駅近くのホテルに戻ると、その答えははつきりとした。先生、ありがとう。神のいのち、神だとわかると、ひとついのちを実感してしまうから、霊の個別化はありえないのでは、……というのが私の質問だっ

たのでした。でも、私は間違っていました。霊とか靈魂とかに、取り違えたイメージを持っていたのでした。先生の遍満するのちは、雅春大聖師とオーバーラップしたところもあるし、でも、個別のいのちの波として、遍満していたのでした。霊は波長のようなものであると、自分なりに納得ができたのでした。

翌朝、ホテルで神想観をしている時、思いがけないものに会わせて頂けました。それは赤々と燃えるような、でも静かな、揺らぎのある大日輪でした。いのちが脈々としている感じでした。先生は生き生きとしていらつしやるのが感じられました。

榎本恵吾先生が描かれる絵では、あまり見かけない赤でした。先生からは、スカイブルーとか緑の色が思い出されます。でもその赤は情熱的で、温かで裕かで、厳かな深い色合いです。生長の家に、實相独在の教えにいのちをかけた先生のみたまを感じさせられました。そしてまた遍満する先生のいのちは、私たちの内にも外にも、細胞の一つ一つにもおわしますのです。ありがとうございます。

10 祝福みつる伝道練成

東京都三鷹市 大谷 敦子

〈この体験は、平成十年の五月の伝道練成のものです。最近家の片付けをしていた時に、みつけた感想のメモ書きをタイプしたものです。〉

初回の伝道に出かける前に、講話を聴いていたとき、少し緊張するかなという感じがあったのだけれど、バスの中で榎本先生が「交差点さん、ありがとうございます。みえる全てのものを祝福して行きましょう。」と仰った時、見失ったものが戻って来た感じがして、「ふわあ〜」と楽なところに行ってしまった感じがした。使命行進曲を先生の音頭で歌ったり、「私は神だあ〜。神がやって参りましたあ。」という元気の出る澄み通った明るい掛け声をみんなで復唱したりと、行く途中から、よろこびが溢れていました。

そのせいか緊張もなくなり、平和な気持ちで、ただ祝福に行ったのだけれど、祝福に取り巻かれていた感じでした。

二日目の伝道も、とても素晴らしかった。

招神歌を歌っている時、そばを流れる小川のせせらぎが聴こえた。一瞬心の中に水の流れが観えた。その水面が光を浴びて揺らいでいる様が、喜んで笑っているように感じられた。その時、「味わう」って、こういう事かなという思いがよぎった。

訪ねたおうちの方もみんな素晴らしい人たちばかりだった。

「みんなトツテモ幸せなんだなあ。」「おめでとう。」という感じが起こった。

そして伝道途中、先生の指示で、お地藏さんの前で一緒に回った三人でお祈りしていた時、明るくて、あつたかくく、丸まった感じがして、四人でニコリしているような楽しさがあった。とつても豊かな祝福伝道をさせて頂けて、とつてもとつても嬉しかった。

この頃の伝道練成は榎本先生が担当でした。伝道担当になった時、楠本先生から「あんたが受けるつもりでやりなさい。」と言われたそうで、初心を忘れず、先生は時間の許す限り、他の講師の講話も、一番前の左端で、練成員と一緒に聴いていらっしやいました。

早朝行事の時も、練成員と一緒に座り、みんなの座るところまで眼を配って下さっていました。

今考えると、恵吾先生の祈りに包まれて、その中で伝道に行っていた気がしています。ひとつ家族の様な温かさ、愉快な雰囲気満ちる伝道（祝福）実践でした。

そして先生にとつて祈りとは、生活そのものであり、生きていることそのものだったように思わせて頂いております。先生ご自身は特別祈っている意識は無かったと思うのですが、存在そのものが、全てが真存在（真理）の祈りだったのではと思わせて頂いております。だから先生が眼に写るだけで、心が清々しく浄まった感じがしていたのだなあ、あらためて思わせて頂きました。先生はご自分の全存在をかけて、祝福の真のすがたを、教えて下さったのだと思うと、胸が温かいものでいっぱいになります。ありがとうございます。

11 奥様への書簡（榎本先生への祈りを込めて）

岐阜県多治見市 長山 弘

合掌。奥さまへ。

突然に榎本先生が「神去られしこと」を聞いた瞬間に、身体が崩れ落ちる衝撃を受けました。同時に、強烈な感謝と悔恨の相反する思いが湧きました。

本当の信仰を、榎本先生から教えられながら、実相と現象を決然として判別できない自らの信仰への悔恨でした。

その日以来、ご著書『弟子像』に戻り、藤原先生のご著書に帰り、『生命の真相』を尋ねる日々を過ごしています。

七月十四日は「那智の火祭りの日」でした。

「那智の火祭り」は熊野那智大社の例大祭。『扇祭』ともいい、熊野十二神が年に一度、大たいまつ先の導で扇みこしに乗って那智の滝へ帰るといふ神事。同大社や滝は、昨年七月、世界遺産に登録された」と、中日新聞は報じていました。（右）

中日新聞 2005年(平成17年)7月15日(金曜日)



世界遺産の森 静寂破る熱風
日本三大火祭りの一つ、那智の火祭りが十四日の日中、和歌山那智郡那智町にある「扇の滝」で開演。約一万人の観客が詰めかけ、燃えさかす炎に焼く音が響き渡った。午後二時、自派に高橋子（左）と、妻のまが次（右）が土まが次を担いで、大たいまつを手に、那智の滝へ下り、扇みこしに乗って那智の滝へ帰るといふ神事。同大社や滝は昨年七月、世界遺産に登録された。

榎本先生は、若きときのこととして、

「那智山の秋の山々の感動。僕は滝壺に行く手前の大きな鳥居を見て驚いた。木の額縁に飛龍ひりゅう権現と書いてあった。……那智山でこの額を見た時、僕は自分の守護神是那智の「龍神」であると思つたのである。この龍は産みの底の龍宮の龍に通ずると思つている。」（『弟子像』60〜61ページ）と書かれていました。

私は、生長の家の「扇の要」であられた榎本先生が、十三日に現し身は神去られ、十四日に扇みこしに乗つて那智の龍神の元へ歸られたのか、と思ひました。

十七日の日、遠くからでも奥様を拝し、榎本先生に感謝の思いを届けたいと、久しぶりに生長の家の道場に入りました。

奥様のお話を聞きながら、奥様を拝しておりますと、奥様の姿の周りに、ちょうど二重写しにもう一人の方が、同じ様にお話されているのです。

私は、涙で眼が曇つたのかも思ひ、瞬きを何度もし、眼を擦り、眼を閉じてみましたが、眼を開けますと、やはり奥様の周りに金色とも、白でない白金ともいえる光に交互に包まれたお姿の方が、奥様と全く重なり、一緒に話されているのです。

御二方が、一つになって話されているのです。

奥様の姿も、薄くなり、光に包まれた、全く不思議な光景でした。

余りのことに、その方のお顔を拝しましたが、存じ上げない方でした。そればかりでなく、奥様が、白板に書かれた文字が、再び光に包まれたのです。

どうしたのかと、何度も思ひました。

私は、靈感も、靈的なものも、余り感じたことのない人間です。

でも、お話と同時に、そのもう一人のお姿は消え、奥様が一人白板の字を消していられたのです。

今まで、そのようなことがあることは、『生命の實相』の中にも書かれてあり、信じておりましたが、まさか自分の中で体験するとは思っていませんでした。

『弟子像』にもう一回戻ってみました。那智山で飛龍権現の額縁を見た時のところに、

「かつて、一日五時間か六時間ほとんど続けて神想観をしていた頃、僕の心に浮かんだと云うか、光景が光ったと云うか、神想観を終って僕は、『吾は万群の龍の上に坐すものである』と、その光景を書きつけたのであった。何故か、黄金色に輝く龍の群が、四角く、やや前後に長く長方形の形に群をなしてうねっており、その上に自分が坐っているのを見たのである。」

と記されていました。

「那智の火祭り」は直接見たことはありませんが、十二本の大たいまつは、百五十段の石段を登った後、螺旋を描くように練り降りると紹介されています。大きなたくさんのたいまつは、動くことで、上からみたら長方形に見えるのではないか。それに、「群をなしてうねっており」という説明、「龍の群」というのも、たいまつの一つ一つが龍に見えるのではないか。そして、「十二の大たいまつ」の先導で、扇みこしにのって熊野十二神の神々が那智の滝へ帰る」という説明も、ぴったり符合していると思いました。

さらに、榎本先生は、

「その後、僕は京都の東本願寺に参拝した折り、正面に掛けられた額が龍によって囲まれているのを見たことがあって、フト、例の光景を思い出して感慨を新たにしたのであった。」

と書き残しておられました。

私に、奥様の回りに現れられた方が、黄金色の（靈人）であったことが何故か分かりませんでした。私

にこのような体験をさせてくださったのは、何であったのか。

「僕は、そのような絵や光景は見たことはなく……」（同書）

という榎本先生の記述は、かつて、扇のみこしの上で神々と一緒に見られた光景のような気がしました。十四日には、真つ直ぐに、那智の神々と一緒になられ、十七日に奥様の更なる守護神として天降って来られたのではないかと、今、思っています。

妻が、奥様のお話の後、

「今日の奥様は今までの奥様ではなかった。直接、榎本先生のお話を聞いているようだった。凄い、迫力を感じました。」

と言っておりましたが、私は暫く自分の体験は話せませんでした。私にとっても強烈な印象でしたから、このようなことを、お手紙にすることがいいのかどうか判りませんが、祈っておりましたら、「お伝えして、良い。」

という榎本先生の声が聞こえたような気がしました。

先生は、真つ直ぐ神になられ、奥様とご家族とをお守りされていると同時に、我々もまた先生が指導と導きをしてくださることを感じます。服部仁郎先生、吉田國太郎先生をはじめ多くのご高弟と共に、特に藤原敏之先生と導師谷口雅春先生、谷口輝子先生のお側で、人類をご指導くださることを心から感じています。

私も、いつまでもぐずぐずしないで、人類のために、少しでもお役に立てるよう行動を開始いたします。

奥様、どうぞ、いつまでもお元気で、多くの人をご指導下さいますようお願い申し上げます。

妻が、くれぐれもよろしくと申しております。

改めて、榎本恵吾先生と奥様に、心からの感謝を捧げます。

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

再拝

平成十七年八月一日

奥様へ

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

平成十三年四月二十一日付けの榎本恵吾先生からの書簡を、先生を偲びつつ、拝読させて頂いております。

『弟子像』の本が完成し届いたことをお喜びいただいて、先生は

「すべて生長の家人類光明化運動なるものそれ自体の展開、経綸の厳かさを教えて下さっているものと拝させて頂くのであります。」

「想えば、生長の家人類光明化運動なるものをイザナギ大神のすがたと解すれば、生長の家人類光明化運動なるものそれ自身でのミソギが現成されているのではないか、という想いが湧くのであります。そして、ここにイザナミの大神が、天照大御神（女性）が復活され、甦り給うていらっしゃることを想うのであります。いよいよ大いなる光の経綸を想うに到らせて頂けるということの光栄を、更に更に更にかみしめ、想わさせて頂くのであります。」

とお書きいただいております。

先生の「一周忌」を迎え、先生を偲びつつ、一年の時の流れの速さに、深い感慨を抱いております。「実相独在」の世界に生きつづけられ、観じ続けられた榎本先生の姿に深い安らぎと生命の栄光を感じて来ました。

私も、数々の体験をさせていただきながら、今は「内なる神の声と導き」に寸分の狂いも間違いもないことを感じています。

み教えの深淵を悟られ、生き続けられた「榎本恵吾先生」に今世で出会えた幸せを、時を経ることに感じていきます。

「脳梗塞」に倒れ、心身ともに苦しみながら、「肉体が本当の自分でないこと」を心から感じております。先生から戴いたお便りの中に、

「神想観の中で、本と長山会長とが一つとなって輝いて、ニコニコとした太陽のごときものの顔となつて『私は無いのですよ!!』と安らかなる聖い輝きとなりました。」

という一節があります。

静かに、静かに流れる涙をかみしめながら、先生の在りし日を偲んでいます。

榎本先生への限らない尊崇の思いと、心からの感謝を捧げます。

奥様も、いつまでもお健やかに過ごさし下さり、人類へのお導きを心からお願ひ申し上げます。

再拝

平成十八年七月九日

榎本 一子 先生

12 「そのままでもいい！」で救われました

神奈川県鎌倉市 堀 浩二
(地方講師・相愛会長)

私は今から約九年前に、まことに不思議な縁で生長の家宇治別格本山に導かれ、そこで榎本恵吾先生にめぐり会い、それまで苦悩に満ちていた魂が救われました。

私は幼い頃より母親の影響で生長の家に触れて、高校生の時に練成会に参加し、大学生の時から生長の家青年会に入つて、組織活動を始めました。そして社会人になつても青年会をやり続け、教区青年会委員長、光明実践委員会議長を拝命しました。その中で青年会の仲間が入つてきてはやめ、入つてきてはやめするのを見て、いつしか「自分ほど青年会をやり続けられる人間はいない」と思いついていました。

私は組織活動だけではなく、会社でも伝道し、講習会にも何人かお誘いしました。そして、癌や白血病などの重病になつた知人、会社の同僚などに真剣に生長の家を伝えるなどして、自分ほど生長の家をやれている人間はいないと思つておりました。しかし、その反面、常に「自分はまだまだやり切れていない」という焦燥感に駆られておりました。そんな中、今から十年前、私は完全に信仰に行き詰まり、「救わなくてはならない」「愛行しなくてはならない」という焦燥感と強迫観念みたいなものの虜になつてしまい、ひどい不眠症になり、夜は一睡も出来ない状態になりました。

しかし、神様は私を導き続けて下さいました。私はまさに神縁としか考えられないご縁で宇治の生長の家道場に導かれ、そこで榎本先生にお会いすることが出来たのです。今から九年前の平成九年六月のこと

です。

その月の短期練成に私は参加させて頂き、そこで最初の座談会の時に、幸運にも榎本先生の班に入らせて頂きました。

先生はそこでいきなり、先生特有にあの「そのままでよい」「人は行とか何とかをする事によって生かされているのではない」という奥義のお話を、班員にとうとうとお説きになりました。

私はそこで「自分が今どういう状態で何故、練成を受けに来たか」という話をさせて頂いた時、先生は「私はまさにこういう人のために生長の家の話をしている」と仰って下さいました。手前みそで恐縮ですが、私にはその時、先生が私に「君が来るのを待っていたよ。やっと来てくれたか。有り難う」と仰って下さっているように思えました。

その後、私は会社を休職して、宇治の道場の研修生となりました。そこで先生は、道場内で私を見つけるといつも「堀君、ちょっと話しよう」と、道場内の空いている部屋で、私一人のために深い尊い真理の話をして下さいました。そして、「そのままでよい。そのままがいいんだよ」と仰って下さいました。

それまでの私は、生長の家を「自分が偉くて、自分がやってやっているんだ」と思っていました。そして、完璧主義の私は、祈りも完璧に、神想観も完璧に、先祖供養も完璧に、伝道も完璧に、組織活動も完璧にと気負って、それで「自分ほど生長の家がやれている人間はいない、他のやつは駄目じゃないか」と思い上がっていたのです。これは偉いように完璧な私の信仰でした。そこに「生かされている」という神への感謝の気持ちは無かったのです。それは自分も含め、全ての人間を、そのままでは救われていない駄目なものであるとして、それを救うために、良くするために「ああしなくちゃならん、こうしなくちゃならん」という考えでした。

先生は私のその我^がで凝り固まった心を受け止めて下さり、

「神は、僕ら人間がああして、こうしてとしなくても、ただ我らを生かし、見守っていて下さる、僕らはそのままでもいいんだよ」

と、やさしくやさしく説いて下さいました。

そして、私は今まで地獄のような心境だったのが救われ、大安心のうちにあつた無条件に神に生かされ、赦されている自分を見出すことができました。

私はその年の六月から八月までの約三カ月間、先生の御愛念のもと、研修生活をさせて頂き、九月から会社に復帰して、現在に至っております。宇治から帰って来た私は健康を取り戻し、そればかりか以前の数百倍の悦びとパワーで、仕事に、生長の家の活動に、趣味にと、毎日、邁進させて頂いております。私はその悦びを多くの人達と分かち合いたくて、個人的にブログを立ち上げさせて頂きました。信仰の悦びの輪はますます拡がっております。

人生に絶望し、地獄を見た私を、先生は救って下さり、そして人生の全ての悦びを先生は私に下さいました。それは単に「感謝します」などという生やさしい言葉ではとても言い尽くせない程のものであります。

私は今でも、先生が亡くなったという実感があまりしません。いつでも天界から見守って下さっていると思っております。現在、生長の家鎌倉相愛会会長・地方講師をさせていただいており、悦びの中で「神に全託」の生き方、活動ができるようになりました。

これからも悦びの活動を、力一杯させて頂きます。ありがとうございます。

13 尊い御言葉を宝物として

京都府宇治田原町 山岡 富佐栄

(白鳩会地区連会長・地方講師)

先生とお別れしてから、あんなこと、こんなこと、喜びをいっぱいいただいたことを、なつかしく思い出しております。

宇治別格本山に奉職し、宇治田原地区ではじめて白鳩会の地区連合会長を拝命！

講習会の目標が来て、「どうしても達成しなくては！」と必死になり、顔をこわばらせ、がんじがらめになり走り続けていた時、大拝殿の前で榎本先生に出会いました。

榎本先生は、むっつりしている私の顔を見て、

「山岡さん!! そんなにがむしゃらにならなくて、いいよ」

と、力強い御言葉をくださいました。

はっと我に返り、講習会の目標にこだわりがなくなつて気持ちになりました。ホツとして掴みを放している、いつの間にか目標は突破!! 宇治田原町からバス二台で講習会に行けるようになったことがあります。

その後、何事にも「がむしゃらにならなくて、いいんだよ」の尊い言葉を大切に、私の宝物として、今日まで来しました。先生のおかげで、この一つの言葉を潜在意識に入れ、幸せいっぱい、喜びを一杯いただき、ただただ感謝です。

また、宇治別格本山に楠本加美野先生がいらつしやうてから伝道練成を定例の行事として生まれ、毎月二十日から二十二日までの三日間のうち、二十一日は宇治田原町にバスで行きます、とのことになりました。私は自分の地元で伝道するのがはずかしく、ある方に私の気持ちを伝えると、「その伝道練成をことわるのはいけませんよ」と注意され、仕方なく参加いたしました。

榎本先生が伝道の係として、宇治田原町へ来てくださいました。

榎本先生は、私が地元での伝道練成をいやがっているのを知り、「山岡さんの言うとおり、行きたいところへ行つてあげるからね。」と愛念のある言葉をいただきまして、はじめは神社参りをしていたきました。近所の誌友さんも参加してくださいました。

その後、研修生より「昔の谷口雅春先生の古い本が置いてあった家があった」ということを知らされ、早速榎本先生にそのご家庭へ礼拝行に行つていただきました。

大きな旧家に一人奥さんが住んでおられ、

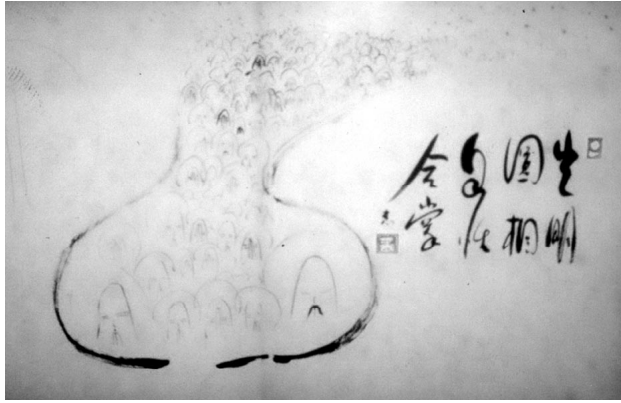
「昔、父と一緒に谷口雅春先生のお話を聞きに行ったことがあります」ということでした。そこは誰一人誌友さんのおられない未開拓地域でした。そのお家で思わず、

「お家を最寄会、誌友会会場として貸していただけませんか」とお願いしますと、

「どうぞ使ってください」

と言つてくださり、そのOさんのご家庭を中心に、聖使命会員さんが次から次へと出来ました。普及誌の愛行者も出ました。

また、Oさんの地域を榎本先生とご一緒に講習会の受講券を手に、推進して、一軒一軒回らせていただきました。おかげで多くの講習会参加者ができ、今は亡き榎本先生の御慈悲で光明化運動が発展し、宇治



田原町は宇治の伝道練成のモデル地区となりました。町民も生長の家のすばらしさがわかってくださり、喜びあふれる伝道練成となりました。

青少年が非行に走り不良少年となり、少年院を出たり入ったりし、バイクに乗り、近所の人にも迷惑をかけているご家庭、病人で悩んでいるご家庭、数々の悩みを持つておられるご家庭にも、榎本先生が行ってくださり、次から次へと幸せになって行かれる方が出来ました。そして、何一つ組織のなかつた宇治田原町にも郷ノ口支部奥野さん、切林支部上野さん、荒木支部土屋さん、南支部山岡の四つの支部で地区連が発足!! 宇治別格本山での教区大会では司会を拝命、又地方講師を拝命、対社会対策部長を拝命!

無我夢中で活動している中、「山岡さん、これどうかね?」と光明 圓相 自性 合掌、あの人もこの人も合掌している御姿の墨絵を戴きました。墨絵の写真を添付させていただきました。「相手の実相を拝みきることですよ」と語りかけて下さっているように思えます。今となつては身の震える思いで、感動、感謝の念でいっぱいです。

榎本先生の優しい誠、真心を受けさせていただきました。光明の輪はサンサンといたる所で響いております。数々のご愛念、ご慈愛、御加護、御恩、想い出を大切に原点に戻り、下さった尊い墨絵を拝ませていただき精進しなくてはと思っております。寒い時も、暑い時も、ようこそ伝道練成に宇治田原町へ来ていただきまして、本当にありがとうございます。今では天界から見守ってくださるように思えます。

榎本恵吾先生、本当に永い間お世話になりました。

「そんながむしゃらにならなくてもいいんだよ」のお言葉を大切に先生を偲ばせていただきます。

榎本恵吾先生、おつかれさまでした。 “安らかに”。

14 榎本恵吾先生へ

京都市西京区 本多清子

二十幾年か前に

初めての短期練成会での

榎本先生のお言葉が

わたしの心をよみがえらせ

喜びでいっぱいになりました

佛壇のとびらに 先生から戴いた

「ニコニコマーク」光明實相」の半紙を

飾らせて戴いております

やさしい慈顔が ほほえみかけて下さいます

常にわたしの趣味を理解して下さり

励ましのお言葉を戴きました

お別れした悲しみを

のり越えなければなりません

榎本先生は

現世のお仕事を終えられ

いつそう高きところへ

おのぼりになりました

毎朝 光明実相 光明実相と
となえております

先生 ありがとうございます

合掌

15 奇しきご縁に感謝

静岡県浜松市 江川 邦彦

平成八年の暮れ、学生時代以来二十年ぶりに、宇治別格本山練成会に参加しました。その日の夜、榎本先生は講話の後、練成員や職員の方々の合唱を指導され、私たちに聖歌を披露して下さいました。

あの時の、合唱される方々と先生との間に通い合う、なんともいえない幸せな雰囲気と、先生の嬉しげなご様子に、なにか非常に不思議な感銘を受けたものです。

その日の就寝の時、「これで救われる！ ありがたい！」という強い思いが自然と湧き上がってきたことを、いまだに憶えております。

何回かの練成会への参加の中で、宇治の方々の信仰による結びつきと、お互いへの信頼の深さと、神に守られているこの空間の、幸せに満ちた時の流れに深い安心感を覚えたものです。

榎本先生をとりまく人々、とりわけて別格本山職員の久都間繁氏は、静岡県での青年会時代の仲間であり、久都間氏と榎本先生の並々ならぬ結びつきを、氏からは色々伺っております。

また、はからずも学生時代、生学連の先輩だった平野孝之氏の結婚式にても、榎本先生、久都間氏と再会し、奇しきご縁だなあと感じ入ったものです。

私にとりましては、学生時代の生学連の活動と人々との結びつきが今日の自分の大きな心の支えであり、平野先輩との数年間の活動を通しての結びつきは、いまだに大切なものであります。そうした方々が、榎

本先生を慕っていたことが、私にも強い影響を与えていたと思います。

それからしばらくして、何度目かの練成会終了の折、久都間氏とともに先生のお宅へ伺い、奥様の手料理をいただきながら酒を酌み交わす機会に恵まれました。

先生は実に楽しげに、信仰のこと、お義父様である藤原敏之先生のこと、ご家族のこと、久都間氏、平野氏など、信仰の仲間のことなど色々なことをお話してくださいました。持参した静岡の地酒を、実にいとおしむように幸せそうに召し上がっていたお姿が、忘れられません。

この方は、神に生かされた、愛すべき方なのだなあと、その時に強く感じさせていただきました。

あれから十年、私は静岡浜松の地において、宇治の練成会で強く願ったこと「使命あらばわが命生かせ給え」を心の支えとして、今日まで生かさせていただいております。

その間、同じ信仰と価値観を共有する魂の半身としての伴侶を得、微力ながら地域での歩みを進めさせていただいております。

尊師谷口雅春先生によって、大いなる信仰と国の命につながることの喜び、そしてこれらを生きる多くの方々との出会いを与えられました。

谷口先生の悲願とされた「日本国実相顕現」と「人類光明化運動」への高き志をわが志として、その万分の一にても実現すべく歩みを進めさせていただきたいと念願しております。

榎本恵吾先生 ありがとうございます。

頓首再拝

16 私の光そのものの先生

滋賀県大津市 田中 康蔵

私の中の榎本先生——それは、暗く冷えた私の心の中に、かすかに温もりを感じる希望に満ちた光そのものでした。その光に吸い寄せられるかのように、毎日、幽齋殿の神想観に通いながら、神の世界に一つになり、共に響きあえる喜びを想い、観じて、合掌させて頂きました。

半年間毎日通った幽齋殿の神想観で、唯一、二回、二人だけの神想観を体験させて頂きました。それは、なんて贅沢な時間だったのだろうと、今も毎日、神想観をさせて頂くときには、その時の神想観を思い出しながら、合掌させて頂いています。

私の中の榎本先生は、今も変わらず私の中で生き続けておられる、光そのもの、師そのものとしか言いようのない存在なのです。

また、練成会での早朝神想観では、榎本先生の気合いの強さと、純粹さを体験させて頂いて、ますます神想観の素晴らしさを実感させて頂いたと同時に、榎本先生先導の早朝神想観の時に出た光と、数多くの自壊作用は、私にとって生涯忘れられない経験になりました。

そして、日常・練成を通して、榎本先生の素晴らしいところは、全てに対する気配りと思いやりです。私にとって榎本先生との出会いは最高の人との出会いでした。

これからも霊界の榎本先生と一体となつて、神想観・聖經読誦に励みたいと思います。
榎本先生、ありがとうございます。

17 “太陽マーク”との出会い

北海道旭川市 山川 貞子

(教区地方講師会長)

一九八二年、私は宇治の練成を受けるため、汽車に乗った。長旅のため手に持った本が『光のある内に』であった。《聖歌のすすめ》とそえ書きしてあったからである。

当時から私は聖歌隊の指導をさせて頂いていた。

宇治の練成が始まった。私はびっくりした。ご本の著者が講話に立たれたのである。そして黒板一杯に“太陽マーク”を書かれたのである。吸いつけられるように黒板を見つめている私の耳に「皆さん!! 何もしなくても始めっからこれ!!」と云う力強い声がひびいて来た。

私はこれになりたくて宇治へ来たのだ。先生の一言で私は魂の底から救われた。もう帰っても良いと思つた。私は“太陽マーク”を旭川へもつて帰りたかつた。先生に『光のある内に』にサインをお願いして、四十部申込んだ。

以来、榎本先生のご愛念は、ご昇天なさる時まで続いた。

18 伝道練成の思い出

東京都渋谷区 北島 直樹

それはまるで傘地蔵のようだった。

大粒の雪がしんしんと降りしきる中、お地蔵さんのようにじっと動かずに、ひたすら『甘露の法雨』を唱えるしかない僕の頭の上で、積雪の量がふえていくのがわかった。

寒さには、ほとんど意識しなくてもすむぐらい慣れてきていた。だが同時に聖經をもつ両手が、凍ってしまったようだ。いや実際には凍っていないが、そんな錯覚に襲われるくらい、動かなくなっていた。

さすがに可哀相だと思ったのか、門前に僕が立っている家の主が、「その雑誌、買いますよ」と云って、その頃はまだB6判ほどのサイズだった「神誌」を何冊か買ってくれた。

帰りの車中、榎本恵吾先生はじつに嬉しそうだった。榎本先生も、傘地蔵になっていたからだ。

「みんな、まっ白」

それがこの伝道の成果のようだった。

「伝道練成」の出発前、どこから借りてきたのかわからないが、観光バスのような設えのバスに、伝道参加者が乗り込んだとき、榎本先生は、カラオケ用のエコーの響くマイクで、

「さああく！ みなさん！ 光が行くんですよ、光が行くんです！」

といってバスの同乗者たちを鼓舞した。それからみんなで『使命行進曲』を唄った。

昭和六十二年の一月、僕ははじめて宇治別格本山の練成会に参加した。その前々年の晩秋、僕は結核で血を吐いた。それから一年ぐらい入院したり、退院しても療養したりの生活を余儀なくされていた。

長く療養していると、本を読むことにも飽きてくる。テレビを観てもさしておもしろいと感じられなくなる。仕方がないから、ビルの屋上によじのぼって星を見ていた。

体力が戻りつつあると実感した昭和六十二年の正月明け、僕は、母親を連れて旅にでた。

まず大阪から高野山に向かった。

高野山の厳寒は、病み上がりの骨身には辛かった。宿坊の煎餅蒲団で寝ていると、寒さのあまり、「もうこのまま、死んでしまいかもしれない」

と本当に想った。すると夜中、若いお坊さんが「湯たんぽ」を運んできてくれた。温かい。これで僕は「生き返った」と思った。

早朝の勤行は興味深いものだった。

この寺の主は、高野山大学の教授で、偉いお坊さんだという。密教の儀式を、暗闇と静寂の中で、僕はまんじりともせず眺めていた。

余談だが、この寺のごま豆腐は旨かった。

高野山のあと、宇治別格本山に向かった。

当時、東京の飛田給練成道場で大勢の人を指導されていた楠本加美野先生が、宇治に移られて、話題になつていたように覚えている。

楠本先生は、たしか河口湖や飛田給で、流産児供養などの霊供養や、徹底した「親孝行」の指導をされて大勢の人を救っておられると話題になり、全国津々浦々から大勢の信徒さんが押しよせていた。

その楠本先生が宇治に移られたので、今度からみんな宇治に行こう……という雰囲気を感じられていた。そういう風評を聞いていた僕も「一度、宇治の練成に行ってみよう」と思い立ち、母親と一緒に連れ立って一月の一般練成に参加した。

宇治につくとすぐに、

「宇治には、楠本先生以外にも『名物講師』がいっぱいいるよ」

と誰かに教えてもらった。すぐにその意味がわかった。なんといっても藤原先生が「超大物」という感じで控えていられる。

このほか、もはや記憶が薄れて定かでないが、僕は練成中に、萩野先生、妹尾先生、竹岡先生といった講師陣からもご指導をたまわった。いずれも説得力のある、魅力的な先生ばかりだった。

このほか、心霊研究をされている大野先生という講師もいらした。この先生は、なぜか僕に親近感をもっていたようので、よく話も伺った。

「幽斎殿は八大龍王で、横の池には龍がいるよ」

と先生がいうので、ならばと僕は、夜明け前にこっそり写真を撮りにいった。後日、現像してみると、確かに白く光る龍の姿が恐いぐらいクッキリと映っていたので、大野先生が「そうだろう」と悦んでくれたことを覚えている。

もちろん、評判の楠本先生にも、練成中、ご指導をたまわった。

宇治本山もやはり寒かった。

宇治の道場の窓から、しんしんと雪が降っているのを、僕は観ていた。

ひとりの講師が入ってきた。榎本恵吾先生だ。この講師、顔は笑っているが、雰囲気鬼気迫っている。

ぼそぼそと喋りはじめたと思つたら、ほどなく黒板に太陽のような、笑っている顔を描いた。そして太陽の絵を白墨でドンドン叩きながら、

「これしかないんですッ！」と叫んだ。

正直、「この人、だいじょうぶか？」と思つた。

「實相の世界、神の世界しかないのだつたら、世の中、警察はいらない。戦争だつて起こつてない」と、率直に思つた。いわゆる「横の真理」云々だつていらないだろう、と思つた。

しかし、この異形の講師、榎本先生は、さらに声を大にして、

「無いものは、無いんです！ これしか無い！」

と、ときおり飛び上がつて訴えていた。

休憩時間に、地下道を歩いていたら、向こうから、背中を丸めて、ぼそぼそと何かつぶやきながら歩いてくる、しみつたれた霧囲氣の人がいる。

よく見ると、榎本先生だ。

「さつきの霧囲氣とえらい違いだなあ」

と思ひながら合掌すると、先生の顔は、ほんの少しだけさつきの「キツとした表情」を取りもどした。しかし同時に人懐こい温和な顔でもある。

なぜか「いい先生だなあ」と思つた。

練成会には、いろいろな人が参加している。当然、中にはプログラムをさぼつて、休憩室や自分たちの部屋で油を売っているティーンもいる。

榎本先生は、そこをめぐらせてやつてくる。

どうしてもプログラム参加をしぶる若者には、その場で説法がはじまる。

練成参加者は、おちおち昼寝もできないのだ。

朝、カッコーの声が鳴り始めると、榎本先生はつかつかと部屋に入ってきて、寝ている人の枕元にしゃがみ込んで、

「ありがとうございますあ〜す！」

と叫んでいる。それでも起きられない若者は、寝返りを打ったり、蒲団をかぶってこの攻撃から逃れようとするが、榎本先生の攻撃も執拗だ。

蒲団をはがされて拜まれた若者は、とうとうあきらめて早朝行事の部屋へしぶしぶ入っていく。

「四時五十分からの早朝行事の前に、三時からね、幽齋殿で神想観をやってるよ」という話を聞いた。

「え？ そんなに早く？ なんで？」

と思ったが、行ってみた。途中、誰かから、なぜだか「行事は四時五十分からですよ」とクギをさされた。しかし「行くのは俺だ」と思っ行って見た。

数名の人が神想観をしていた。もちろん楠本先生も、榎本先生も神想観をされている。

「なくんだ。みんないるじゃないか」

と嬉しくなつて、僕も参加した。

うろ覚えだが、この幽齋殿での行事のあと、たしか「おみくじ」のようなものをみんなで引いた記憶がある。

そのとき、ある人が「感謝」と書いてある「おみくじ」を引いたので、照れ笑いをしながら、

「ああ、やっぱり感謝が足りないんですね。これからもっとまじめに感謝するようにしなきゃね」

と言っている、榎本先生が横から割ってきて、

「どーして、そういう風にとるんですか！ あなたの中に、すでに『感謝』がいつぱいあるから、こうして『感謝』って出てきてるんじゃないですか！ あとはそれを形にするだけ！ 喜んで形にするだけって言うことですよ！」

と、いつもの「捕獲説法」だ。その人は、ビックリした顔つきで、榎本先生の顔をまじまじと見つめながら「そうなんですか？」と聞き直した。

榎本先生は、嬉しそうに破顔微笑して、大きくうなづいた。

一般練成会が終わった。みんな帰り支度をしている。すると道場員の人が、

「このあと引き続き『伝道練成』というのがあります。よかったら、参加しませんか？」

と言った。僕は、

「どうせ自分は療養中の、放浪の身。十日も十三日も変わらんから、ちよつと参加してみるか」

と思つて参加することにした。

「榎本先生の伝道練成はすばらしい」

という評判を聞いたことがあった。伝道練成に参加すれば、榎本先生からさらに指導を受けられるかもしれない、という期待があった。それで楽しみにしていたら、今回から、伝道練成の指導は、榎本先生ではなく、榎本先生に変わりました、という。

これを聞いて、正直がっかりした。

「榎本先生じゃないの？ なあんだ」

と、落胆した。しかし、すでに参加の申し込みをした後だ。しぶしぶ参加してみることにした。こうして練成がはじまり、榎本先生と一緒に、バスに乗って「伝道」に行くことになった。

「みなさんが光！ 光が行くんですよ！」

榎本先生の魂が奮ふるえていた。

榎本先生の伝道は、一直線だった。

というよりも、あれは「伝道」ではないのかもしれない。いわゆる「伝道」ではないと思う。真理を知る者から、いまだ知らざる者への啓蒙活動というものではない。

まだ知らない誰かを拝みに行くという行為だ。

というより、伝道するもしないもない。伝道に行く僕たちも、これから伝道を受けるであろう人たちも、一様に同じ「光」である。

こちらの光が、あちらの光を拝みに行く。そうすることで、あちらの光もさらに光を増してくる。同時に、拝んでいるこちらの光も、また増してくる。ところが逆に、あちらの光も、じつはこちらを拝んでくれている。あちらの光が、こちらの光に力をくれる。

こんな繰り返しだ。「光の相互干渉（相互交歓）」のようなものではなかったか。

冬の京都は、たしかに寒かった。

しかし、光は「寒い」などと言うはずがない。

白い雪が降ってきた。

白い光の粒子が舞い降りてきた。

光の祝福だ。

ひと粒がどこまでも清み切っている。

『聖經』を誦げていると、いろいろな想いがつきつきと湧き起ってきた。

しかしほどなくそれも、降り雪ぐ無数の白い光の粒が、つきつきと、やさしく消していく。唱える口もこごえて動きにくくなってきた。

口以外の身体は、もうお地藏さんのように静止して動かない。

白い光の粒子が、ほほえむように降っている。

その清み切った白い光の中に、今生きて在ることの充溢した幸せを、このとき僕は感じていた。これが「榎本流の伝道」なのだろうか。

伝道する僕らが、伝道されていたのだ。

傘地藏を想い出して、おもわず笑った。

はじめから、何も起きていなかった世界。

はじめから、すべてが起きていた世界。

はじめから、生成化育の律動のみが、ただ鳴り響くだけの世界。

はじめから、生きようとする世界。

はじめから、この歎びだけの世界。

はじめから、榎本先生は知っていたのだ。

帰りのバスで『使命行進曲』を歌っていた。

窓外の景色は、涙でぼんやりとしか見えなかった。

19 神の子 “歎びの通信教育”

東京都渋谷区 北島 京子

合掌

二十三年前の五月、私ははじめて「皇居勤労奉仕」に参加させていただきました。以来、今日に到るまで、この「勤労奉仕」は、私のライフワークのように、毎年続けさせていただいています。

忘れもしない、初参加のときのことです。ご奉仕の休憩時間に、芝生で一緒に参加しているみなさんといろいろなお話をしているときのことです。

西宮からご奉仕に参加されていた前波さんという方が、生長の家の方で、西宮のご自宅で「榎本恵吾先生を招いての誌友会」を定期的に行っているとおっしゃるのです。

それで、ある日の会るとき、参加していた地方講師の方が、どうしても朝、早く起きることができないので、なかなか早朝神想観ができないという悩みを、榎本先生に、相談されたそうです。

すると榎本先生は、

「何者が寝ているかと思っっているんですか！」

と一喝されたそうです。

この話を立って聞いていた私は、

「何者が！」

という言葉聞いて、一瞬、考える間もなく、

「ああっ！」と大きく口と目を開いて、雷光に打たれたように、

「神の子が寝ているのだ」

と気づいて、ホウキを持ったまま、ズツこけて転んでしまいそうになりました。というより、自分のまわりの世界が、まるごとひっくり返ってしまったようでした。このときの私の驚きようは、それぐらい凄まじかったのです。

この「何者が寝ているのか！」という榎本先生のお言葉は、私にとって生涯忘れ得ぬ衝撃でした。そしてこのお言葉は、その瞬間から、私の運命の扉を開いてくれました。

実際、私も「寝る子は、よく育つ」と自分にも言い聞かせ、また他人にも自己弁護しているくらい、朝が苦手でしたから、その私の自己肯定以上に、私を大肯定してください、その榎本先生という人こそ「何者ぞ？」と思いました。

「そんなおもしろいことをおっしゃる榎本先生という人に、どんなことをしてでも、どこであつても、今すぐにでも会いに行きたい」

と思い、前波さんをお願いしました。

こうして、西宮にある前波さんのご自宅で開かれる、榎本先生がいらつしやる誌友会に、私は大喜びで行かせていただきました。

これが榎本恵吾先生との最初の出会いでした。

榎本先生と出逢えた嬉しさのあまり、東京に帰ってからも、毎日、天国にいるような気持ちでした。

たとえば、ベートーヴェンの『第九』の『喜びの歌』（第四楽章）と『運命』のレコードを連日聴いては、この喜びを噛み締めていました。

またあるときは、嬉しくて嬉しくて自分の部屋でひとりで舞い踊っていました。道を歩くときは、ひとりでにスキップしている自分がいました。この嬉しさは、抑えようにも抑えようがないほどでした。

こうして、私の中に喜びの世界が広がりました。言葉にできないほどの歓喜の天国が、日々現われてきました。その喜びは、とどまるところを知らないほど大きいものでしたから、私の中の「天井」を吹き飛ばしてくれました。私のいのちは宇宙いっぱい広がって行きました。

この、拍手を打ち鳴らしたくなるほどの大きな喜びと感動を受けたことを、前波さんにお話ししたら、前波さんは、

「その気持ちを、ご自分で先生にお手紙に書いて送られたらどうですか？」

とおっしゃったので、私は苦手を承知で、先生に手紙を書きました。手紙の中に、

「それまで合わなかった掌と掌が自然に合うようになってきました」とも書きました。

私は、どうしても自分に嘘がつけない性分なので、ありがたくもないのに、簡単に合掌をする気持ちにはなれませんでした。それが榎本先生と出逢ってからは、いつも喜び感動していたので、嬉しくて、おのづから発するごとく、本心から合掌ができるようになってきました。

このことを手紙に書いて送ったのでした。

この手紙と一緒に、感謝の気持ちを伝えようと、プレゼントも送りました。プレゼントとは、スケッチブックや和紙でできた冊子、半紙、ポストカードブックなどでした。

先生は、書き物をされているので、書画の道具になる贈り物の方が役に立って喜ばれるのよと、前波さんに聞いていたからです。

すると驚いたことに、後日先生は、私が贈った冊子や半紙、スケッチブックやポストカードブックの全頁（丸ごと一冊）に、「真理の言葉」をいっぱい筆書きしてくださり、また（無数の合掌している御仏様やにこにこ笑顔の）画をいっぱい描いてくださって、私に贈ってくださいました。

ある冊子には、『無限常楽』と題字が書かれていて、扉を開くと『真理の吟唱』の「有限そのままに無限を悟る祈り」が全部書写してありました。

「み光は降り給えり　み光は降り給えり。大神の伝え給える　み言葉は　まことにぞ　光にましますのである……」

という、榎本先生のお好きなお言葉にはじまる一節が綿々と書かれていて、まるで筆書きの『真理の吟唱』のご本のような重厚さでした。

三十枚綴りのポストカードブックの一枚一枚のカードにも、この「み光は降り給えり……光にましますのである」のお言葉が、全てのカードに、似ていながらそれぞれ異なる（彩色ゆたかな）絵と一緒に、丁寧に書いてくださっていました。

このことがあってから、私の喜びはまたさらに大きくなりました。そして先生に、この自分の魂の喜びを、「こんなに喜んでいきます！」と伝えたくて、私の親友と共謀して（？）数々のお便りとプレゼントを、

ときおり贈るようになりました。

プレゼントとは、榎本先生に気づかせていただいた究極の喜びの世界を「形」にしたものがよいと考え、私なりに工夫したもののばかりでした。

聖典に出てきた「黄金の薔薇三輪」という言葉に感激し、実際に「金色の薔薇」を三輪お贈りしたことがあります。

「桃」が永遠の生命を表すという話を何かの本で見つけて感激したので、先生に「桃」をお贈りしようと思いましたが、季節が桃が売っていなくて、代わりに（よく似ている）リンゴをお贈りしたこともありました。そのとき神の子は神の中から生まれたというお話をもじって『桃から生まれた桃子ちゃん』と題する（自分で書いた）拙い詩（というより創作神話）を添えてお送りしたのですが、すると先生はさっそくご返事をくださり、

『神の子』は桃だけでなく、リンゴをも自在に生み給うのだね」

と云ってよろこんでくださいました。

すると嬉しくなった私は、その後日、また『みどりご』というタイトルの創作神話（緑の木にいつぱい実っているコトノハ「言の葉つば」を、朝も昼も夜もいつぱい食べて大きく元気になった子供のお話です）を「緑のマジック」で書いてお贈りしました。

するとまた先生は、

「全開きに開かれ切ったスミキリの輝きを拝ませて頂きました。そしてあなた様があなた様であられる静かなるものもそこにあって、私の魂も落ちついて来るのを憶えるのであります。

一つ一つの文字が黄金のみどりなるみづみづしさなるものなる輝きそのものであり、一つ一つの文字に

三千のみ佛が坐し給ひ、全身の細胞ごとごとく如意宝珠にして、いちいちの如意宝珠にまたまた三千のみ佛け坐し給うているのを想うのであります。……永遠に久遠に生長を続けて頂きたいのであります。……

如来説法天人舞遊

浄土現前光明無碍

大川京子如如様

榎本恵吾

と、感激のお便りを下さって喜んでくださいました。

（お手紙の末尾には、よく私の名前の下に「如如様」と書いてくださっていました。大川は私の旧姓です）
そうしますと今度は、先生のこの感激の便りを受けて、また私は、この上ない喜びでいっぱいになりました。

その心境はまさに、生意気にも「不立文字」そのものであると思いましたが、ポストカードに一文字も言葉を書かず、白紙のまま、金の色紙を、金粉のように細かく切ってはさんで、先生がこのポストカードを開かれたときに、黄金が散華するように工夫して、また実際そうなることで、先生がびつくりされるお顔を想像しながら、ドキドキ、わくわくしながら、歓喜の「不立文字カード」をお贈りしたこともありました。

またあるときは、早朝の明治神宮の参道に落ちていたドングリが、私には黄金に光輝くドングリに見えたので、先生に「秋の香り」のお便りをお届けしようと、手紙と一緒にそのまま封筒に入れてお贈りしたこともありました。

すると先生も東京にいらした時は、明治神宮を早朝散策されていたとのことで、懐かしく、感慨深く、嬉しく感じてくださいました。

またあるときは、

「先生はいつも龍宮城にいらっしやるから、私も乙姫になって『玉手箱』をお贈りしよう」と思いつき、ダンボール箱に、海をイメージしながら、いろいろな色を使って絵を描いて、旅行のお土産を詰めてお贈りしたこともありました。

このほか、ヘンデルの「水上の音楽／王宮の花火の音楽」や、アヴェ・マリア集、なつかしい日本の童謡、古式のオルゴール音楽……などの音楽テープをお贈りしたり、またキリストさまやマリアさまの聖画集や、宮内庁からの賜り物（皇居勤労奉仕）など、おりおりに各種のいろいろな贈り物を、天使風に工夫してお送りしました。

とくにヘンデルの音楽をお贈りしたときの先生のお喜びはひとしお一入でした。

「何か大いなるものの祝福が、大宇宙となつて私を包んで下さっていることを、あなた様のご愛念が代表して下さっているのを想うのであります。そのような時は、やっぱりヘンデルが私の周囲で鳴り響くのですね……そのことを、あなた様がどうしてか知って下さっているんですね。私にとつて嬉しいことがもたらされる時、必ずどこからかハレルヤかとかヘンデルが響いて来るのです」

と喜んでくださいました。

また「アヴェ・マリア集」のテープをお送りして、その後日、聖母マリアさまの画集を見つけてお送りしたときも、先生は「音楽入りの絵を頂いたことになるのですね」と云つて喜んでくださり、

『マリア』のテープは殆ど毎日車の中で聴かせて頂いておりまして、宇治川沿いの景色が一そうなつかしくみづみづしさを増すのでございます……神様があなた様となつて現われ給いて、私を抱き包みはぐくみ給うのを想わせて頂くのでございます」

と祝福してくださいました。ちょうど八月の大祭を迎えてご準備に忙しくされていた頃だったそうで、マリアさまの画集に対しては、

『マリア』様の絵は、私を心ゆるやかにさせて下さるためにお現われになった」

と云って喜んで下さり、さらに「あなた様のご愛念の輝きを家族みんなで感じていた」ともおっしゃって祝福してくださいました。

ちなみに、お送りしたお手紙やプレゼントが届いた日は、不思議と（私は存じなかったのですが）先生のお誕生日であったり、先生のご結婚記念日であったりしたので、先生も、

「どうしてあなた様は、わたしのことを知っておられるのでしょうか？」
と不思議に感じておられました。

このように、お贈りしたどのプレゼントにも、先生は喜んでくださり、いつもすぐに先生から、喜びと祝福と「祈り」に満ちたお手紙が返って来ました。

「開かれゆく歓びの沃野を想いながらお手紙を拝読いたしました。あなた様の内なる歓びが輝きに輝いてすべてのすべてとなり給う……」

と、私の魂の喜びに対して、喜んでくださり、祝福の祈りを授けてくださいました。そして、

「あなた様そのものが神のいのちの宣言によって存在しておられる、神様の〈いのち〉そのものでいらっしゃるのであります」

という「唯神實相」のお祈りの言葉を、いつも紙面いっぱい書いて、にこにこ笑顔の絵と一緒に送ってくださいました。

あるときは、いのちの輝きを讃える「祝詞」のりとを贈ってくださったこともありました。

「大切に大切にすべてはあなた様を包んで輝いているのであります。そうです。あなた様の全細胞を貫いて天照す御親のみ光は流れ入り、輝き出でてすべてのすべてとなり給うのであります」

またあるときは、特製の「御札」おふだを書いて送ってくださいました。

あるとき私は「神癒祈願」を申し込みましたが、私は自分の氏名の欄に、「生きとし生けるもの」と書きたくなったので（こんなこと書いたら叱られるかなと思いつつも）そう書いて送りました。

（私は「すべてのすべて」だから名前が無い、だとしたら、「生きとし生けるもの」ではないか、と思いつかんだのでした）

そうしたら、先生はそのまま「生きとし生けるもの」と「人形」ひとがたに筆書きして送ってくださいました。このとき、（先生の）お喜びが伝わってくるかのように、先生はこの（落款入りの）「御札」を書いて下さったのでした。

つけ加えて白状しますと、榎本先生の「にこにこ笑顔」の絵を、私は「もう少し可愛い方がいい」と思い、大きく口を開けて笑っている「にこにこ笑顔」を描いたり、頭の上にリボンをつけた（女の子風の）「にこにこ笑顔」を描いたりして、さらに喜びが倍増した「にこにこ笑顔」を描いて、榎本先生にお送りしていたのでした。

今にして思えば、「何んということをするんだ！」と怒られそうですが、それほど当時の私は、嬉しくて嬉しくて、榎本先生と遊んでいたように思います。

また榎本先生も、こんな不躰な娘に、腹を立てずに、快く遊んで見せてくださったのですから、他の先

生とは、一味も二味も違った先生でした。

この一連の往復書簡は、榎本先生による、ちょうど親鳥が卵の殻をつついて雛（神の子）を誕生させてくださる「啐啄」の「通信教育」のようなものではなかったかと思えます。

こうして私は、榎本先生から、神の子として、如来として育てていただいたのでした。

もともと私は『生命の真相』を何十回も読んで真理の勉強をするようなタイプではなく、子供のような自由な感覚でものごとをとらえて、直観的に、本能的にものごとを楽しく（神遊びとして）とらえる傾向の強いタイプでした。

そのような私の個性を、榎本先生はちゃんと理解してくださり、大きな喜びと愛で包んで、受け入れてくださり、讀ませてくださいました。

そして予想を超えるユニークさで、私のユニークさに応えてくださり、私の中から「神性」を引き出してくださり、大きな愛ではぐくんでくださいました。

「あなた様はどういうご使命の輝きを持つてお生れになったお方にましますのか。ただただ見護るばかりであります。神様はユニークなですね。そのようにあなた様もユニークであられるのですが、天使的に見れば、自然な天然な薫りに満ちた崇き崇きなりわいにましますのです」

私は、この地上に生れてきて、榎本先生と出逢えて、本当によかったと思えます。

この先生でないと、私は、魂の目覚めと満足と絶対の安心を得ることはできなかつたと思えます。

自分をゆるらせて、自分を愛せて、自分に満足し、安らかな自分になれて、神の子の自分と出逢えたことは、神様からの最高のプレゼントだと思えます。

あるときのお手紙に、

「いつの間に私たちはこのような祝福の真ツ只中に生れ出てきたのでしよう！」

と書いてくださいました。まさに先生がお説きくださっているのは、究極の「喜びしかない世界」であり、その真実を、先生は、毎秒、毎秒、一瞬、一瞬に全身全霊、全存在をかけて、愛と祝福と生命がはじけんばかりの躍動をもって、お伝えくださっていたのだと想います。

先生は、私が享受した爆発的な喜びに、爆発的な喜びと祝福の祈りで、応えてくださったのだと想います。そしてそれこそが、唯神實相の世界、常樂の世界を日常に生きていらつしやる先生のお姿であろうと思

います。

榎本先生のもとに集う人はみんな、先生の愛と喜びの波動と一つになることで、いのちの本源の世界へ、喜びの宇宙へと帰らせていただけなのです。

どんな小さな喜びでも、それを認めることで、喜びはどんどん大きくなります。そこに生じた喜びの波動は、さらなる喜びを生み出し、より大きな喜びへと導いてくれます。

今、眼を閉じれば、なぜか榎本恵吾先生と谷口雅春先生が、ご一緒ににこにここと微笑まれながら、

「神の子の人生は、そのままでもいいんだよ、思う存分喜び、楽しみ、味わい、経験するんだよ、そのために人は生れてくるんだよ」

と、語ってくださいているお姿が浮かびます。

それは長い間、人生の目的、生きる意味について漠然と悩んできた私に対する回答であるように思います。

神様からのギフトとして、天からの恵みとして、今回の人生を授かって生まれてきていたのだなあ。いつの間にか私は、極楽浄土の住人になっていたのだ。ああ、幸せだなあ、何とありがたい、嬉しいことだろうと、しみじみと思います。そう気がついた今、これからの人生を、丁寧に生きてゆき、他を思いやり、人のお役に立って生きてゆきたいと思います。

そしてあの日、あの時、私のいのちの中で鳴り響いた歓びが、今ふたたび「第九」のメロディーと一緒に鳴り響き出しました。

さらに、現在も、過去も、数々の前世も、すべてを超えて、今「はじめのはじめ」に帰り着くことができました。この歓びを、日々感じて、味わって生きて行きたいと思います。

『聖經』の中で、天使が訪れて、歌うがごとく「真理」を諭されていますが、いろいろな場面で、天の童子が現われて、み空を舞い踊ったり、ときに「生命の長老よ！」と呼びかけて質問をしたりする光景が描かれています。

これらの光景を拝見していて、

「ああ、私は、ここにでてくる羅綾を身にまとった天童たちの一人だ」

と直観しました。そして真理を教育してくださる「師」にして「生命の長老」である「天使」とは榎本先生だったのだと悟ったのです。

『聖經』には、天使が真理を語る時、神光が花びらのごとくさんさんと降り注いでいる、と書かれ

ていますが、まさにこの「實相の国」そのままを啓示されるために、榎本先生はこの地上に出現された天使^{てんのつかい}だったのだと、今あらためて思うのです。

「實相そのまま」を現したる世界を教えてくださいただけでなく、

「ますますあなた様に幸いが燦然と輝かれ、私の限らない祝福が光りとなつて永遠に久遠にあなた様を引きつつみ幸いをもたらしつつづけますことを深く祈念申し上げます」

と、お手紙の最後で祝福してくださいましたように、先生はいまも永遠に久遠に、私たちの魂を礼拝し続けて下さっているのです。

今なおたくさんの「祝福」の花びら（光）をさんさんと降り注いで下さっている榎本恵吾先生の御魂に、そしてその奥にいらつしやる谷口雅春先生の御魂に、限らない感謝を捧げます。

神は愛なり。

無限^{おおき}大な愛を、ありがとうございます。

20 「本流の真理」に導いて下さった先生

兵庫県西宮市

友江 允有己

まさ ゆき
(兵庫県栄える会)

榎本恵吾先生は、私を「生長の家の本流の真理」に導いて下さった師であります。

平成十七年七月十二日までの四年間、毎月幽斎殿にて、榎本先生のお姿や表情を拝見しながら、先生のお言葉を通してご指導頂きました。

その榎本先生が七月十二日、「僕と君とは一つの『いのち』だからね」、と言って私の『いのち』の中に飛び込んで来て下さいました。

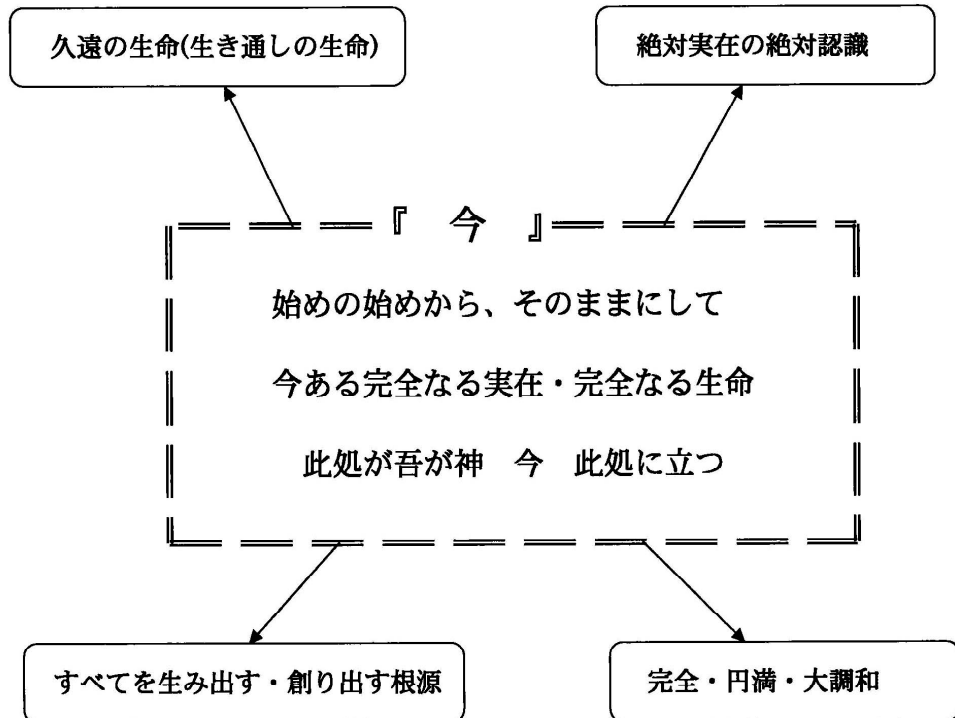
私は榎本先生と今まで通りいつもご一緒させて頂いております。ありがとうございます。

実は平成十四年九月二十九日から平成十七年六月十九日まで、われわれ有志で榎本先生に月一回ご指導いただく「一(はじめ)の会」が開催され、その内容を掻い摘んで記録に残した文があります。ご参考までにお送りいたします。

※ 編者注。お送りいただいた「一(はじめ)の会」ご指導綴り」全三十一ページのうち、左に二ページ分を掲載させていた
た
だ
き
ま
す。

平成 17 年 5 月 27 日

『 今 』



- ☆ 吾は生み出す力なり・与える力なり・神の導きは、神想の法則に裏付けられている
- ☆ 「今」に立っている吾は、生み出す存在なり、与える存在なり
- ☆ すべてのものは、「今」の中に成就している
- ☆ 何ごととも「今」に立って行なえば良し
- ☆ 「今」は一切無にして生命と光の実在→ここから神がすべてを生み出し給う
それ以外のものは一切無し！！
- ☆ 吾が環境、年齢、キャリアなど一切関係なく、「今」がすべての創り主である

『人類光明化運動』

～人類光明化運動は『今』すなわち絶対実在の絶対認識に立つ運動～

■ 人類光明化は「今」に還る呼吸の中のみ実在する。呼吸が「運動」である ■

- ☆ 信徒・「絶対実在の絶対認識」とは、人間は久遠に光り輝く生命の絶対実在であるという自覚認識の運動
- ☆ 一般者・人々が「感謝と満足と幸福」を得ながら、「完全なる幸福の生活」しか無い生活の持続運動

■ 現象への適応から実在への帰趨 ■

- ☆ 人間は物質的造形物であり、肉体、生命とも有限である存在から、人間は靈的存在であり、本来肉体無し、病無し、迷い無しの完全円満の久遠の生命であるという絶対認識へのシフト
- ☆ 「物質的な豊かさが人間の幸せ」という経済合理性の幸福論から、文化感や倫理感、哲学、さらには形式化、計量化などで表せない絶対的な人間の原理の価値の創造
- ☆ 日の通らない神秘で不安な深海から、龍宮無量寿の龍宮海へ

■ 見える存在を支配している、見えない存在の力が大きくなる ■

- ☆ 空気、心、生命、音、数、紫外線等々どれも目に見えないが世の中に充満しており、それぞれの影響力は無限に等しい
- ☆ 細かいことが全体に影響する→細かな事々の接続部分のリレーションは目に見えないが、それが事の成否に大きく関わる
- ☆ 目に見えない根本とそこから発生する目に見えない働きと、それを繋いでいく目に見えない接続体が、見える存在を支配している

■ 与えられる側から与える側に立つ ■

- ☆ 中心は周囲に対してすべてを与える存在である
- ☆ 絶対実在の絶対認識の「今」に立って中心を生きる

21 「そのままで尊い」の自覚を新たに

東京都小平市 早川 純子

榎本恵吾先生に初めてお目にかかりましたのは、昭和六十二年八月、宇治別格本山での一般練成会でした。「天地一切のものが自分を祝福している」と分った時に感謝が出来た、というご講話が、今も印象に残っておりますが、当時は神罰の恐怖に依るノイローゼがひどい状態でしたので、先生の素晴らしさが分かりませんでした。

平成十一年七月二十五日、東京第二教化部の日曜光明講演会に、榎本恵吾先生がお越し下さいました。その時のご講話の素晴らしさに心の底から感動致しまして、是非個人指導をして戴きたいと思い、お電話させて頂き、八月、盂蘭盆供養大祭に参加し、二十日にご指導して戴きました。

その時、自分の思いを十分お伝え出来ませんでした。先生のご著書『はなびら 葩さんさん』を戴きました。帰宅後、早速拝読させて頂きました。魂を解放してくれる素晴らしい内容でした。

私は「ねばならぬ」ですぐに自縄自縛いたしますので、その度に『はなびら 葩さんさん』を拝読させて頂き、「そのままで尊い神の子である」と、自覚を新たにさせて頂いて戴いております。ご本を開けばいつでも、先生のニコニコしたお顔が目には浮かびます。

榎本恵吾先生に限りない感謝の思いを込めて、拙文を書かせて戴きました。心から感謝申し上げます。有り難うございます。

22 「輝ける万青年」の榎本恵吾先生

兵庫県宝塚市 栗山 華江

合掌 有難うございます。

今より三十年ばかり前のこと、昭和五十五年八月十日〜二十日迄の「宇治別格本山・谷口清超先生ご指導特別練成会」に於て、私が初めてお目にかからせていただきました榎本恵吾先生は、まだ四十歳前で、学生つぼさの抜けない、青くさくて、お堅い感じでいらつしゃいました。が 開口一番、

「或る日、この大拝殿前のお庭を、竹箒で掃いていたら、手水鉢や松の木やらが、突然 黄金色の光を放つて、キラキラ輝やいて観え出したんですヨ。すると、森羅万象が、『ああ、有難いなア』と感動の渦に包まれて、心の底から『有難うございまーす！』と感謝することができたのです。」

とおつしゃいました。私は、「ああ、この先生はまだお若いのに、随分『魂』の次元のお高いお方なのねエ」と、いたく驚き、深く印象に残りました。

それ以来、この先生を慕うて、度々、「練成会」へ参加するようになりました。私が、「宇治」へ来ますと、先生は、とても喜んで下さり、講話中、壇上で、飛んだり、はねたりして、喜こびを、全身で表現して下さいました。

そしてついに、昭和五十七年八月「盂蘭盆供養大祭」に、私は研修生となり、「祭司部」のお受け所にて、霊牌書きの御奉仕をさせていただくことになりました。

その折、お初にお目にかかり、御一緒にお仕事することになったのが、榎本一子先生でした。

恵吾先生は、一子先生のことを、「初めて出会った時、何かとても懐かしいものを感じたんだ。それで、奥さんに決めたんだよ」と、おっしゃられたので、「うわあ、とても純粹で、美しい決め方やなア」と、大いに感激したのを、覚えております。

恵吾先生は、優美で、しなやかな体型で、男性にしては、珍らしく、清純な雰囲気、芸術性豊かな感性をお持ちでしたので、そこが、文人的、詩人的で、ロマンチストの私と、フィーリングがよく合い、親しくさせてもらいました。

そして、青くさかった先生のお顔は、いつしか、御自身が黒板にお描きになられたニコニコマーク、そのままの円満な、福々しい笑顔に変貌してゆかれました。

又、先生は、奇しくも、私の実兄と同一歳であられましたので、私は、恵吾先生のことを「先生」というより「真理」をお教え下さる「お兄さん」のような思いで接するようになってゆきました。

ですから、「先生、いつまでも、若々しく万年青年でいらして下さいネ」と願うようになっておりました。

なのに、享年六十八歳の御生涯は、余りにも短か過ぎたのではありませんか。

「宇治」へ行きましたが、先生の、あの美しいお姿をもう拝見し得なくなったのは、甚だ寂しい限りです。

でも、観点を換えれば、（御家族の方々には、まことに申し訳ありませんが）、あの年齢で逝かれたればこそ、あの若々しい輝やきのある万年青年のお姿が、わが胸の中に定着し、これからも、想い出の中に、永遠に生き続けることになり、むしろ、私にとっては幸いであったのでは……と思えるようになってきました。

何故なら、恵吾先生が、もつとお歳を召されて、腰が曲がり、杖をついて、歩いてらっしゃるお姿など、到底想像できませんし、又、見たくもありませんもの。

神様は、その人と周囲の人達にとって、最も適した時期に、天に召さしめ給う、というのは、まことに「真理」でございますネ。

あらためて、恵吾先生の御冥福を、心より心よりお祈り申し上げます。

榎本恵吾先生、どうも有難うございました！ 再拝

23 先生、今日も力をかして下さい！

大阪市旭区 真田 積

「自分で解決出来ない問題でも、神なら解決できる」と講師の講話で聞かされていた。「親に感謝」ということが、私の永年の課題だった。

小学校高学年時に、家庭の不和から母が家出し、祖母と叔母に育てられた。その時、父が自分の感情のいらだちから、不満を子供（私）に投げかけた。それで私はまた憎しみ、怒り、恨み、悔しさ等の悪感情がたかぶって、消すことができなかった。

家中のゴタゴタのさなかで、父の勤め先の友人から、「生長の家」の教えにふれることになった。

しかし、社会に出ても、よろこび一杯の胸中にならず、近くの道場で講師に「感謝」への方策を質問するが、満足する答が得られるものでなかった。「あくまでも、自己の内なる自覚のめざめから」——二十数年前の時点では、そういうことは考えられなかった。

解決の糸口は「赦し」と「現象無し」に徹することだと、頭では理解しても、さて実行となると、悪感情が先廻りして、「赦し」は至難の業であった。

『甘露の法雨』の『七つの灯台の点灯者』の神示に、「汝ら天地一切のものと和解せよ」と。また「神に感謝しても父母に感謝し得ない者は神の心になわぬ」と教えられている。しかし、親と同居している日常生活の中では、「五感に現われるものは《心の影》で、実在するものでない。無いものは、無いのだ」

と教えられても、根底からくつがえすには至らなかった。

相談相手の叔母は、家の事情はよく知っていた。自分たちの行為行動、私が叔母と楽しく会話をかわすことが、母から見れば憎らしく思われたことかも知れない。

叔母は、会うたびに、「私たちの代で業を消すように、専念するんだ」と話されていた。

毎日、迷いの連続だったことから辛抱できず、宇治練成会の門を叩いた。

そこで、本部から異動でお見えになった榎本先生との出会いが始まる。

講話後、風呂場で会話がはじまる。

先生から、「講話の内容が本当に良かったのか悪かったのか。失望させたのでは」と、謙遜された質問をされたように思う。

「誰が聞いても理解できるような、自己の体験を通した講話だったので、感動した」と返答したことが、昔のことながら今も記憶に残っている。

その後私は、盂蘭盆の大祭奉仕には休暇をとって、十数年間毎年奉仕させていただいた。「会場係」から「祭場係」と呼び名が変わるが、その大祭奉仕の中で、私は先生から毎年、励ましと感謝のハガキをいただいた。

大祭中は、焼香台の種火の準備が私の役目で、炭火が飛び散るのを防ぐ濡れ雑巾をもつこともよき体験でした。

新年祭に初詣りした時に、「れいはいせうしき霊牌合祀祭奉仕員」の公募があった。私には恵まれた身体が与えられているので何かお役に立ちたいと、前々から思っていたので応募し、参加するようになった。

合祀祭で先生は、せいきが経机が並ぶ前列の右側に座っておられて、視線が合うと笑顔で迎えていただいた。

あと片づけには、先生自ら両手に机を持って、経机の積み重ねを手助けいただいた。これは簡単なことの

ようであつても、なかなか出来ることではないと、常々感じていて、嬉しかった。

終ると、送迎バスのところまで足を運んでこられた。私は、「合祀祭に参加することが非常にたのしく、二、三日その余韻が残っています」と言った。先生との会話は「以心伝心」で十余年に及び、今年十二月で十二年間、皆勤で奉仕させていただくことになる。ただただ感謝です。

母は、他界する一カ月前、私たち二人の前で、「以前から随分いじわるをしていた」とわびていた。その後、危篤の状態の時もあつたが、妹婿に頼んで、合祀祭には参加させていただいた。ただ無事を祈るばかりでした。

私は現役時代より息子の成長発展が何よりも嬉しく、昨年四月、三十代にして一流企業で課長職に昇格した時には、誰よりも先にそれを榎本先生に報告した。先生は即座に「本人の努力もあるが、お父さんの日頃の奉仕のたまものです」と。……

私は「積善の家に余慶あり」の言葉が好きでした。徳久先生も、「入るところと出るところは違う」と講話の中で話されていたことを思い出しました。

最近、宇治別格本山職員の方々の異動があり、顔ぶれが変りましたが、変わらないのは霊牌供養することです。ご先祖への感謝が、ここにきて出来るようになったと思います。「継続は力なり」。つづけることは大切です。

昨年七月に突然、天界へ旅立たれました先生。

私は、霊牌合祀祭に参加するたびに、

「今日も楽しく奉仕させていただきました。今日も力をかけて下さい」と、先生に声をかけています。

24 人生、丸ごと輝けるかどうか！

京都府長岡京市 松本 久

榎本先生に触れているかどうか、ということは、「人生が丸ごと輝けるかどうか」ということと同じだと思います。

私は、母がこの教えを信仰していたおかげで、小学生の頃から、少しは神誌に親しんでいました。それが、青年期、特に二十七歳頃から精神的悩みが深くなり、ねばりついて、何とか信仰で解決したいと思うようになりました。その頃の強い思いを一言でいえば、「宇宙に溶けたい！」でした。

宗教書にも熱心になり、これは！と思う人を見つければ手紙を書き、会いにも行きました。ですが、心は晴れません。

やはり、「生長の家」だけになりました。先の私の強い思いを実現しようと思えば、「感謝」の思いが湧出するようにならないと、一心に思うようになりました。

その年の十二月に宇治別格本山で練成を受けました。が、まだ真理は私の魂に届きませんでした。それどころか、浄心行の後で、私はドーンと落ち込んだという珍しい人間でした。泣けなかったからです。うつすら涙さえ出さず……。

練成を終えてから、「ありがとうございます」を毎日一万回唱えることを目標にしました。何とか感謝の思いが出て来やすいよう、イメージングをしながら、ゆっくりと唱えていました。が、そうした一回一

回の唱えの「質」にとらわれていたのでは、回数が稼げないのです。 「やつぱり、数だ！」 私は極端から極端に走る性格で、今度は速射砲のように「ありがとうございます。ありがとうございます。アア、ありがとうございます」と唱え出しました。

何カ月やつても、何も開きません。五官の汗だけが溜ってゆきました。

二年程経って、二回目の宇治練成を二日間だけ受け、榎本先生のあの黒板に書かれた「ニッコニッコ顔」を見ました。その瞬間、天の岩戸が開きました。

「自分は完全円満だ！」 内奥の眼がすっかり覗きました。不思議でした。これを、どこで覗いているのだろう……。

すぐ、先生に会いに行きました。

先ず、私。

「感謝ができないんです！」

その後、先生は私にとってはもう驚天動地のようなことを言われました。

「谷口先生は感謝のできなかった人なんですよ」

勿論、「はじめは」という意味でしょう。が、これを聞いてから私の中で溶解が始まりました。

「じゃあ、なぜ、あんなに『感謝』だけをピックアップして強調するんですか」

の短かいやりとりの間に、「下から上へ向かって頑張る」という重い構図がフツ飛んで、「アレエ？」 何だか嬉しい感じです。もう後の細かい質問はいつでもよくなりました。

「この人だ！ 自分にピッタリだ。この人について行けば自分は大丈夫だ」。

すぐ研修生になりました。

今、奈良県の教化部長をされている葛原本部講師と同期で、一カ月間の研修中、氏が的確な質問をして、

それに先生が答えられているのを見ると、「こらあ、置いて行かれるなあ」とあせりながらも、私の特性で細かく細かく喜びを味わっていたのでした。

そんなある日、特に強い、「グツ、グツ、グツ」と胸を打つような喜びが何度か来たかと思うと、その胸にあつたような蓋がはずれて、今度はそこにホームベースのようなものがあつて、そこから約九十度の方向に、喜びの白い煙（湯気？）が、フワーと拡がって行くように観えました。その時です。

「ああ、貴方、今、豊かなものが流れていますねえ。」

驚きです。「この人は、いったい何者なんだ!？」

私には、敬愛の気持ちと、一種の恐れに似たものも、つきまといました。

時が進んでも、私から先生への質問は「もっと深くするには？（効率よく）」に帰結しました。

ある日、「今日こそは」と、ご自宅に伺って、

『〇〇してからではない』と言われても、もつと深く味えるようになるために、一秒でも先生の前に座っていること自体、修行じゃないですか」

と、伺うと、

「僕は嬉しいですよ」

と一言だけ言われて、後は奥様と一緒にニコニコしておられるのです。

《クソオ、二の矢も出されへん。今日はみつちり質問を組み立てて来とんのや……》

等々、とてつもない師を持ったことを恨みに思った時もあります。

そのうち、齢五十を過ぎて、何とか「榎本研修生」と言える自信もできて来ました。

いつも、いつも「喜び」があります。「どこから来たの」とか、「どうして在るのか」を超えて——もう消えませぬ。そして、「（私）は）無いなあ」があります。

無限であるのは、とてつもない幸せです。特にこの十年、無限の能力を精一杯発揮させて頂きます。

感謝。合掌。

25 『光のある内に』三冊ボロボロに…

東京都葛飾区 二葉 美代

榎本恵吾先生とのご縁は、昭和五十四年、『光のある内に』のご本を戴いたころからと思います。

「あめつち はじめ天地の初発に立ちて―人類光明化運動の樂的展開論」

この表題を見た時、私は飛び上がらんばかりに喜びました。

当時、白鳩会教区連合会長を拜命していた私は、本部目標を達成することが出来ず、悩んでおりました。

「これだ、これだ！ これさえ学べばよくなる!!」と。

しかし、読んでみると、「樂的展開」どころか、とてもむづかしいのです。

「久遠の今」「未発の中」「真空妙有」「久遠天上理想国実現の神示」等々……その当時の私には、むづかしいことばかり。

「自分の中に『生長の家』を発見し、話す相手さえも自分の生命の中に発見するのだから、ついに『生長の家』もよそごととなり、単なる遠くのものを目指し示す説明に終つてしまう。」

「絶対の自由を得ていなければ、真の光明化運動は不可能である。」

「『教えは教え、運動は運動。そこには多少の矛盾不一致があってもいい』などということは許されない。」

「実相の展開そのものとしての運動に参加しなければならない。」

等々、むづかしいことばかり……。

ひたすら夢中で『光のある内に』のご本を、読んで、読んで、読み続けました。

ついにこの『光のある内に』のご本が三冊ボロボロになりました。

今、拝読してみると、とてもよくわかるのです。

私は今、しみじみと、この『光のある内に』のご本に育てられたのだと、心より感謝申し上げております。

榎本先生からは、数限りなく、すばらしいご著書や、絵や音楽や…を贈呈していただきました。どれもこれも心にしみて、私たちの血となり肉となつてくださったものばかりです。

今、私は、榎本先生の膨大なご著書、『弟子像』が愛読書になつております。

谷口雅春先生の、十二弟子に匹敵するすばらしい先生方のお心を、榎本先生でなければと思われるご筆致で、あざやかに浮び上がらせていただき、今は亡き先生方のお声が聞こえるようなすばらしいご本でございます。

今、わが「みすまる道場」で、この『弟子像』のご本をテキストにして、講話を毎月させていたただいております。

「現象の日本なし。実相の日本のみ独在す。真の愛国心とは、この実相日本を礼拝する心にほかならないのである。実相のみを愛し、実相のみを観てゆけばよいのである。」

「敗戦前、真の日本なし。敗戦後、真の日本なし。現象裡に真の日本なし。前後際断の今即久遠にの

み真の日本あり、真の日本を知らざる者は、日本人に非ず。」

今や世界が唯物論の極に来て、その終焉を迎えようとしており、新時代の生命の胎動が、肅々として起こりつつあることを感じます。今や世界は、谷口雅春大聖師のお示しいただいた「實相独在」の真理、神意に一大方向転換すべき機を迎えているのではないのでしょうか。

私も、尊師の教えを受けた者として、『光のある内に』のご本でまいって頂いた種子を大切に育て、花咲かせ、実を結ばせて、「みこころの天に成る世界」を地に成らせる創造の光明化運動に、いのちをかけたいと念願いたしております。

榎本恵吾先生は、まことに神であらせられ、真理そのものでございました。

「これからなるんじゃない。もうすでに、そのまま神の子です。それを喜んでいいんですよ。」

このお言葉は先生独得のもので、自己限定をしていた私たちの心の扉を開いてくださいました。「そのまま、神の子は完全円満である」と『生命の實相』のご本を貫いて教えていただいているのですが、それを榎本先生のお口からお聞きした人々が、みんなその悟りに入ることが出来るようになりました。

まことに、まことに、すばらしい御魂の先生でいらつしゃいました。この偉大な先生にご縁をいただけました私たちは、まことに日本一の幸せ者でございます。

高き神界を天翔けり、国翔けりしてご活躍されるであろう榎本先生に、又めぐり逢うことができる日の来ることをたのしみに、日々精進してまいりたいと存じます。

本当に、ありがとうございました。

26 榎本先生、天国から応援してください！

徳島県小松島市 村崎 孝江

合掌 ありがとうございます。

私は十月二日、主人の永代供養をするために、主人の大好きだった宇治へ参りました。

いつもニコニコと太陽のような笑顔の、榎本講師せんせいのおられない宇治は淋しすぎます。いつも一緒に宇治へ行ってくれた主人もいない。体の中を風が吹き抜けてゆくようで、宇治別格本山全体が光を失ったような気がいたしました。

榎本講師せんせいに初めてお目にかかったのは、昭和六十三年二月度の宇治短期練成会の時でした。

当時私は、日赤病院の医師から「膵臓癌すいぞうがん」と言われ、死も覚悟して自分の葬式費用まで用意しておりました。私が「最後に宇治へ行つて水子さんにお詫びをしたい」と言つたので、下痢がひどく、体重も十キロも減つて衰弱した私を、主人が宇治練成へ連れて行ってくれたのでした。

練成部の方の御愛念により、特別室の個室を貸して下さり、そこで榎本講師せんせいの御指導を受けました。

側にいた主人が、思わず「ああ嬉しい、ああ有難い」と合掌しました。主人の合掌する姿を見たのは、この時が初めてでした。私は驚きました。榎本講師せんせいは、

「あなたより御主人の方がもつと素晴らしい、いい御主人が居て幸せですね」

と祝福して下さいました。

榎本講師が帰られた後で、主人が

「今ここへおいで下さったのは榎本講師ではない、神様がおまえの病気を治すために、おいで下さったのだ。だからきつと治る。絶体に死なないよ」

と言つて励ましてくれました。

主人は、榎本講師のお姿の奥に、神様のお姿を見て合掌したのでした。

「御先祖様は全部永代供養しよう。父母にも感謝していなかった、水子さんにも、自分が父親でありながら一度の供養もしないで、本当に申し訳なかつた」

と懺悔して下さい、二人で聖經『甘露の法雨』を読誦いたしました。

榎本講師のご指導と主人の愛念によつて、私は地獄のような恐怖から解放され、健康体になることができました。

あれからやがて二十年になります。二十年の間にはいろいろ試練もございました。

姑が二度も骨折して入院し手術を受けたり、リハビリ等、大変でした。

主人も、十年ほど前よりパーキンソン病でほとんど働けなくなりました。

私は病人の世話と商売とで、外に出て「生長の家」のために活躍することもできませんでした。

榎本講師にお目にかかるたびに、

「私は生長の家のお陰で救われましたのに、何のご恩返しもできません」

と申し上げますと、

「ご恩返しはできる時にすればいいんですよ。あなたは生きていただけで、人のお役に立っているんです

よ」

とニコニコと祝福して下さいました。

主人は私のために店舗の二階を造作して、流し台やトイレも付いた立派な誌友会場を作して下さいました。せめてものご恩返しと思って、十二年間誌友会をいたしております。

平成十四年に姑が九十七歳で昇天し、十八年八月には一年十カ月寝たきりで入院していました。主人も昇天いたしました。私は健康で、姑や主人の世話ができることがただ有難く、苦労だと思ったことは一度もありません。

もうこの世には、私を励まし、やさしく見守って下さる榎本講師も、主人もいません。私は砂ばくの中で一人ぼつんと立っているような気がします。

「榎本講師せんせい。もし天国で主人に会ったら、我がままで寂しがりやですが、仲間に入れて下さい。そして素晴らしい生長の家の眞理を聞かせて下さい。お願いします。」

主人も、大好きな榎本講師と一緒になら、すべての束縛から解放されて、自由自在に天国を飛びまわっているかも知れません。

十月二日、宇治で奥様の一子講師にお目にかかり、以前より若々しく美しく輝いておられるお姿に驚きました。

私も泣いてばかりではいけませんね。頑張ります。

「榎本講師せんせい、天国から応援して下さい。お願い致します。」

長い間、本当に有難うございました。

27 困難も喜びに変えて

兵庫県洲本市 榎本文昭

榎本先生、ありがとうございます。数年前 先生の著書『弟子像』を拝読した時、私も先生の良き弟子になれればと感じたことを覚えています。

その頃、先生は、すでに練成部から神癒祈願部に移られていて、私は幽斎殿と周囲の縁がなんとなく居心地よく、そして何よりも榎本先生のお顔を拝見出来るのが楽しみで、毎年数回参拝させて頂いていました。それがいつしか年一回の七夕参拝となりましたが、それでも近況をご報告にお逢いいたしますと、一年間のブランクなど全く感じないかのように

「いつも君のことを祈っていますよ。君は素晴らしいね」と唯々励まして下さいました。そして私が時々先生宛に書きました手紙を、『真理の吟唱』の御本の間に挟んで、常にお持ち頂いているとの事でした。

「そうなのだ！ 私の日常生活は自分一人ではないのだ、いつも先生と二人三脚で歩いているのだ」と感激いたしました。

今、私は先生から頂いたニコニコマークのお手紙とハガキを、『真理の吟唱』の御本に挟んで、毎日携帯いたしています。

そうしていろいろな困難に出会った時も、先生とご一緒に、むしろ喜びに変えて来たように感じます。これからは 私の心の中に神様、榎本先生が常に一緒に居られることを忘れず 明るく、元気に、そしてニコニコ顔で頑張っていきたいと思えます。先生、本当にありがとうございます。合掌

28 永遠に、御魂と共に

東京都杉並区

岡

正章

(盟友)

(一) 誓いの血書をしたためられたという榎本先生

およそ半世紀前、日本国の危機が叫ばれていた時代、昭和三十三年の十一月―榎本恵吾先生も私も学生時代でした。今の本部会館ホール（当時は「大道場」と言った）で行われた、谷口雅春先生のお誕生日をお祝いする生長の家青年会東京都支部の「文化祭」で（谷口雅春先生の御前で）、私は「街頭伝道形式による青年の主張」というテーマで演説をさせていただきました。そのとき私はまだ恵吾先生を知らなかったのですが、恵吾先生は私の演説を聞かれて、帰ってから血書をしたためられた――「自分はこれから生涯を通じてあなたと共に歩むことを誓う」ということを書き、指を切って血判を押されたそうです。（その現物は私に見せられることなく、どこかへ行ってしまったということですが……）

しかしながら恵吾先生の生前には、私がまったく愚かで不敏で、そんなひたむきなお気持ちに万分の一もお応えることができませんでした。

しかし、魂は永遠です。これから永遠に、恵吾先生の高貴な魂と一つになって、「われ光なり」の自覚でお仕事をさせていただきたいと、思っているのです。

(二) 伝家の宝刀、本を生み出す

(一) から約二十年後。 “命をかける”とは、「生活をかける」ことだ！ 『理想世界』一〇〇万部達成のために、生活を懸けて、命がけでがんばるのだ！”

と、猛烈な嵐のような青年会運動、『理想世界』百万運動を展開していた時代。

「いや、 “生長の家”に命をかける”とは、『今すでに完全』な『久遠の今』に、『実相独在の真理』に命をかけることだ！ 今、よろこぶことだ！”

との魂の叫びから、「天地の初発はじめに立ちて——人類光明化運動の樂的展開論」など “いのちがけ”の文章を、その頃、 “ガリ版刷り”でひたすら刻んでいた榎本恵吾青年……昭和五十三年ごろのことです。

私は当時、『理想世界』誌の編集長として「いのちがけ」の気持ちでその編集に打ち込むとともに、その二十年ほど前に存在した「理想世界合唱団」の復活、さらには「生長の家混声合唱団」から、男声の加わった新しい「聖歌隊」の結成に奔走していました。

「男こそ、歌うべし！」の呼びかけに呼応して、真つ先にその混声合唱に加わってくださったのが、当時青年の榎本恵吾先生でありました。

「この日本の危機の時に、聖歌なんか歌うよりも、軍歌をうたって、日本をまもる運動にいのちをかけるのだ」というような『理想世界』百万運動の嵐の中で、「聖歌隊」を結成するのにも、また「いのちがけ」の気持ちが必要なような時代でありました。

私はそうした中で、榎本先生の前記論文「天地の初発に立ちて——人類光明化運動の樂的展開論」などを見せていただき意気投合して燃え上がり、これと私の「よろこびの歌をうたおう」という講話録を合わ

せ共著にして自費出版しよう！と話し合いました。

しかし、当時、本部職員の給与は安くて蓄えはなく、自費出版などする費用の出所はありませんでした。そのときわが家には、文字通りの「伝家の宝刀」がありました。祖先伝来の日本刀を、父が軍人であったから「軍刀」にしてあつたものです。これを「美術品」として骨董屋に持ち込み、金に換えると、ひよつとすると百万円くらいになるのではないか。それを自費出版の費用に充てよう――。

そう考え、とらぬ狸の皮算用で「背水の陣」を布き、印刷屋さんに原稿を持ち込みました。本のタイトルは恵吾先生の提案で、『光のある内に』としました。「内なる光」を信じよるこび輝かそう、との趣意からでした。

組版・校正刷りまで出してもらつた段階で、さてと新宿区の骨董屋さんを訪ね、「伝家の宝刀」を持ち込みました。「買ってほしい。美術品として、いくら値がつくでしょうか……」と。

結果は意外、全くだめでした。これは、「美術品」として売れるようなものではない。そのまま、祖先の形見として家に置いておいた方がいいですよ、と言って、買ってくれようとはしません。

困りました。が、本の方はすでに組版まで終わっています。

仕方がない。借金してでも、何とかしましょう――ということ、校正を進めました。

そして、「この中には谷口雅春先生のご文章の引用がたくさんあるから、谷口先生に、原稿のままでは読みにくいのできれいな校正刷りをお送りし、お許しをいただいてから出版するようにならなければ……」と、かねてから考えていたことを実行にうつしました。

――雅春先生から、お返事がきました。

「拝啓 『光のある内に』の校正刷来ました。とても全部よむ時間がないので、ところどころ読んで

自分の書いた本の一節を再発見し立派な本だと思ひました、何故これを自費出版に限定したのかと不思議に思ひました。

自費出版として自己縮小しなければ、これはしばらくのうちに一万部は出ると思ひました。日本教文社の中島省治さんに公けの出版に出すことを相談しなさい。……（後略）

——飛び上がって喜んだのは、言うまでもありません。

こうして、結果的にはわが家の「伝家の宝刀」が『光のある内に』の本を世に生み出したことになったのです。

日本教文社刊として、タイトルは『光のある内に』のあとに「聖歌のすすめ」という副題がつけられ、昭和五十四年八月二十日付けで初版三千部が刊行されました。そしてこれは約五年の間に六版まで版を重ね、谷口雅春先生が予測されたように約一万部が売れました。反響は大きいものでありました。二葉美代先生のように、三冊ポロポロにすり切れるまで読んだというような方もあらわれてくださいました。（現在は在庫無し絶版）

恵吾先生は、ここに書かれた通り、「実相独在」の真理に命をかけて、生涯を全うし貫かれました。

私は、恵吾先生と同じようには行かず、実相と現象のあいだをさまよいながらも、「教化部長」という私にはまったく不向きなお仕事を、なんとか二十年以上も続けることができたのは、この『光のある内に』があったからでした。そして、どの任地でも恵吾先生のいのちがけの応援をいただいたからでありました。榎本恵吾先生にただ感謝あるのみです。ありがとうございます。

(三) ホームページを作成して

平成十八年九月四日夜、ある方から次のようなメールを頂戴しました。

「〈題名：すごいHP!〉『榎本恵吾記念館』ホームページのあまりのすごさ、すばらしさに感動しています。ものすごい影響がありそうです。ありがとうございます。ひっそりとひそかにひろまってほしいです。」と。

——私も、同感です。今朝も、「記念館」のホームページ(ウェブサイト)を開いて見直し、聴き直し、感動しています。

これは、私が作ったものではない。何ものかに導かれて、大いなるもののみ力を戴いて、作らせていただいたものだと思います。

具体的には、皆さまの積極的なご協力のたまものです。

まず、一子奥様のご賛同、ご協力、ご遺作書画など資料のご提供をいただくことができました。そのほか、多くの方々から膨大なご遺作文書・楽譜・演奏の録音などを提供していただき、あらためて恵吾先生のすごい創作意欲にも感動を新たにしています。

さらに、これらをウェブサイトにとまとめて提供する技術は、主として私が山形時代、勤務時間外(夜)にパソコン教室の「ホームページクリエーターコース」に通って習得させていただいたのですが、これも何ものかのお導きによるのでしょうか考えられないことでした。

そして今、「榎本恵吾記念館」ウェブサイト作成には、恵吾先生のお導きをいただいていることも、間違いありません。人間わざではできないような、円滑現象が次々に起こって、うまく作られて行っています。私も、それに感動しつつ。

冒頭に掲げさせていただいたメールのように、これは

「ものすごい影響がありそうです。……」

ひっそりとひそかにひろまっていつてほしいです。」

と、あらためて私も思います。

恵吾先生と私の魂の出会い・交流で特に輝いた時は、最初が昭和三十三年十一月。このときは、私はまだ恵吾先生を知りませんでした。

次が『光のある内に』出版の時。

そして今、ホームページ「榎本恵吾記念館」やこの「榎本恵吾先生を偲ぶ文集」の作成で、幽明境さかいを異にしながら、恵吾先生のお導きをいただいていると思います。

これからはますます己れを無にして、永遠に、恵吾先生の御霊と共に、「久遠の今」に立つて無限によろこびの生長を遂げて行きたい、よろこびの人類光明化運動をさせていただきたいと切に願っています。

久遠の榎本恵吾先生！ バンザイ！

29 「月光」にわが友を偲ぶ

和歌山県新宮市 山中 照也
(友人)

今朝、テレビから「月光」が流れてきた。演奏者はステイブ・コワセビッチ、彼の弾く曲を聴くのははじめてだった。素晴らしい演奏であったことは言うまでもない。

第三楽章に曲が移ったとき、僕の遠い記憶の中の榎本恵吾が突然脳裡に現れた。いつものあの笑顔だった。

憶えているだろう、あの時のことを。僕たち高校三年の秋だった。千穂小学校講堂での山崎寿子さんのピアノリサイタルを、二人で聴きに行ったことを。二年先輩の彼女は、当時東京芸大在学中だったが、その時の演奏曲は紛れもなくベートーベンのピアノソナタ「月光」であった。僕たちは乏しい知識で批評めいたことを語り合い、楽しい青春のひとつを過ぎ、彼女が新宮高校合唱部の恩師のご息女であったことが、僕たちの誇りであり、憧れでもあったことを共に喜んだことが、ふと甦ったのだった。

あれからもう五十年も時は流れてしまい、君は何を急いでか逝ってしまったが、しかし君は僕の記憶の中で褪せることなく生きているのだ。

君との思い出は、高校の合唱部での活動、生徒会長としての君の活躍、僕の下宿での数々の出来事など、懐かしい思い出があり、卒業後の数年間、それぞれの道を歩みながらよく語り、ときには酒を酌み交わし、歌を歌ったりよくしたね。

ある時、君は焼きおにぎり七個持参、僕の下宿で一週間瞑想を続けたことがあった。すごいやつだと、そのとき思ったのだった。

君は意志を貫き、君の道を邁進し、その目的を成し遂げた。そして多くのよき人たちに惜しまれ、天に召された君を想うとき、誇らしくもあり、万感胸に迫るものがある。多くを語るができないことを許してほしい。

「月光」に君の面影と遺徳を偲びつつ、ご冥福をお祈りします。

合掌

30 お別れの辞

京都市北区 内海 靖浩

(友人)

合掌

榎本恵吾比古命の御霊様、貴殿が昇天された報に接し、洵に吃驚致しました。御健勝にて御活躍のことと思つて居りましたので、とても信じられるものではありませんでした。御生前の御厚誼、ありがとうございます。ありがとうございました。貴殿のなごやかな笑顔を思い浮かべつつ心からお別れを申し上げます。さようなら。

本部時代、ご一緒に編集の仕事をした折のことなど、なつかしく思い起しました。又、八雲（目黒区八雲の本部職員寮）での楽しかった日々など……。

宇治での長きに亘つての、貴殿の貴いすばらしい御仕事、御指導、折々に伺つて居りました。ありがとうございます。ありがとうございました。

御恵贈いただいた御貴著『弟子像』改めて、しみじみ拝読させていただきましよう。貴殿は、為すべきことを為し終えたのではないかと思つたします。サツと逝かれた、まさに高級の御霊であられたのでしよう。心から御冥福をお祈り申し上げます。

御奥様、御子様たちを高き処からお守り、お導きくださいましよう。どうぞどうぞ……。

現象なし、物質なし、肉体なし。實相独在、生き通しの生命のみ。貴殿は、このことを見事に証しされたのでしよう。大聖師谷口雅春先生の御教えそのままを生き、逝かれたのでしよう。小生もそのうち、大

聖師の御許に参ることでしょう。そのとき迄、しばらくお待ち願います。
御遺族皆様方の今世の御多幸を心からお祈り申し上げます。
お別れのご挨拶が遅れましたことをお赦し願ひ上げます。

弔歌

御佛みほとけの慈悲の御ひかり浄らけく
蓮華はすの台うてなを包み給はむ

合掌

平成十七年七月二十六日

内海靖浩謹書

大兄 榎本恵吾御霊様

